

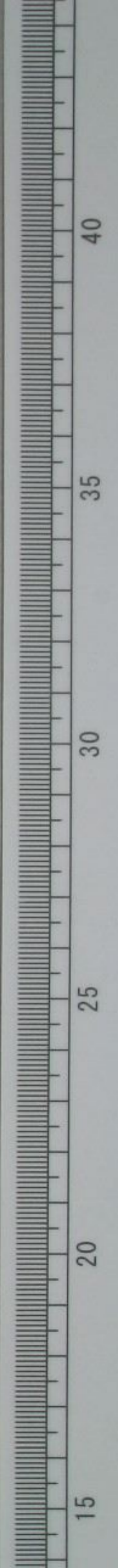
畫筌

七福神
和歌三神
五歌仙
歌人
源氏戲
相撲
衣冠
器物

五

E
150
5

逍遙文庫
文庫 6
1296
5





畫筌卷五

目錄

七福神しちふくじん

川渡布袋かわわたふくろ

和歌三神わかのさんじん

梨壺五歌仙うりのつぼごうかせん

天神てんじん

渡唐天神わたがうてんじん

大井川筏士おおいがわいかた

佐野渡さのわた

布引瀑布ふひきりたふ

井出玉河いでたまがほ

夕顔ゆがわ

須磨すま

明石あかし

夕霧ゆがきり

三夕さんゆが

牧笛かひふえ

加茂競馬かものけいば

鞠引まじりひき

雷公らいこう

万歳まんざい

放下ふたし

腕推之戲うでおしあそび

碁碁標いごいごめしるし

膺推之戲うでおしあそび



曲太鼓 <small>まがら鼓</small>	相撲之圖 <small>すまゝのづ</small>	楠正成 <small>すまのまさなり</small>	武田信玄 <small>たけだのしんげん</small>
上杉謙信 <small>うさぎけんしん</small>	冕冠 <small>べんかん</small>	冠 <small>かん</small>	烏帽子 <small>かぶと</small>
條帶 <small>じょうたい</small>	革帶 <small>くわたい</small>	褌 <small>ふんどし</small>	曲領 <small>まがらね</small>
腰被 <small>こしぎ</small>	紳 <small>しん</small>	天衣 <small>てんい</small>	壁代 <small>かきしろ</small>
十二章 <small>じふにしょう</small>	袿 <small>き</small>	齊 <small>せい</small>	袴 <small>はかま</small>
太鼓 <small>たいこ</small>	敲鉦 <small>かきかね</small>	如意 <small>にようい</small>	寶珠 <small>ほうしゆ</small>
轎車 <small>けんしや</small>	榻 <small>たた</small>	笏 <small>しやく</small>	武者 <small>むしや</small> 全圖
同後之圖 <small>どうごのづ</small>	武具彩色法 <small>ぶぐさいしほ</small>		葛蒲旗 <small>くわぶし</small>

人體にんたい 并ひら 好色こうしき 春畫はるゑ 之法のしほ

畫筌卷五目錄終

畫筌卷之五目

〇二



布袋

標出法印



布袋

和歌三神



玉津嶋



住吉

倭人物



漁神



大黒

和云大黒王

大己貴命

入等と朱五まくお笑



福祿壽

福祿壽
老人と云
人なり
南極老人
星の精



壽老人

標出七十歳筆

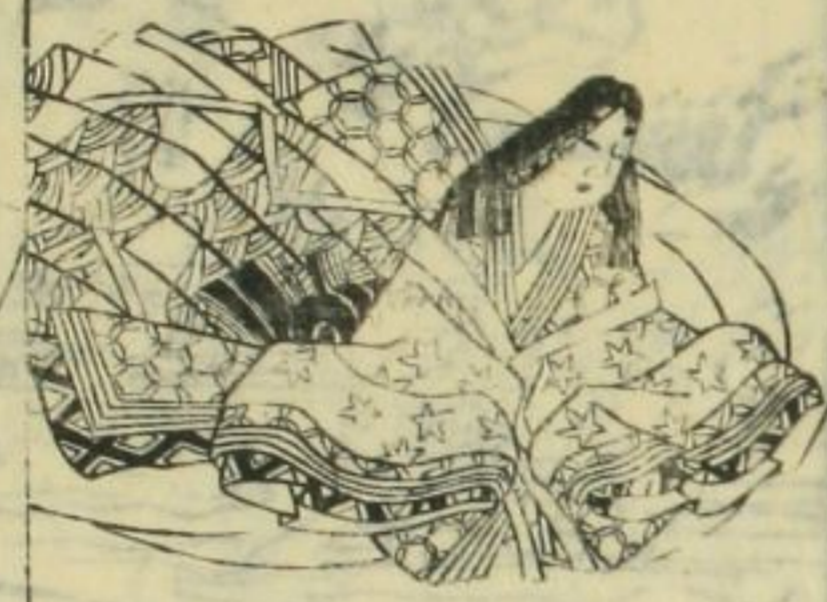
大壽

畫卷之三

神天満天



侍内馬



部式泉和



元信筆

人磨



畫卷之三

渡唐天神



安行

輔大勢伊



部式紫



仙歌五壺梨

門衛深赤



伏見の御所にて
御座り候御座り候



守備

伏見渡



探馬

あつては
あつては
あつては

伏見の御所



桃田橋

伏見の御所



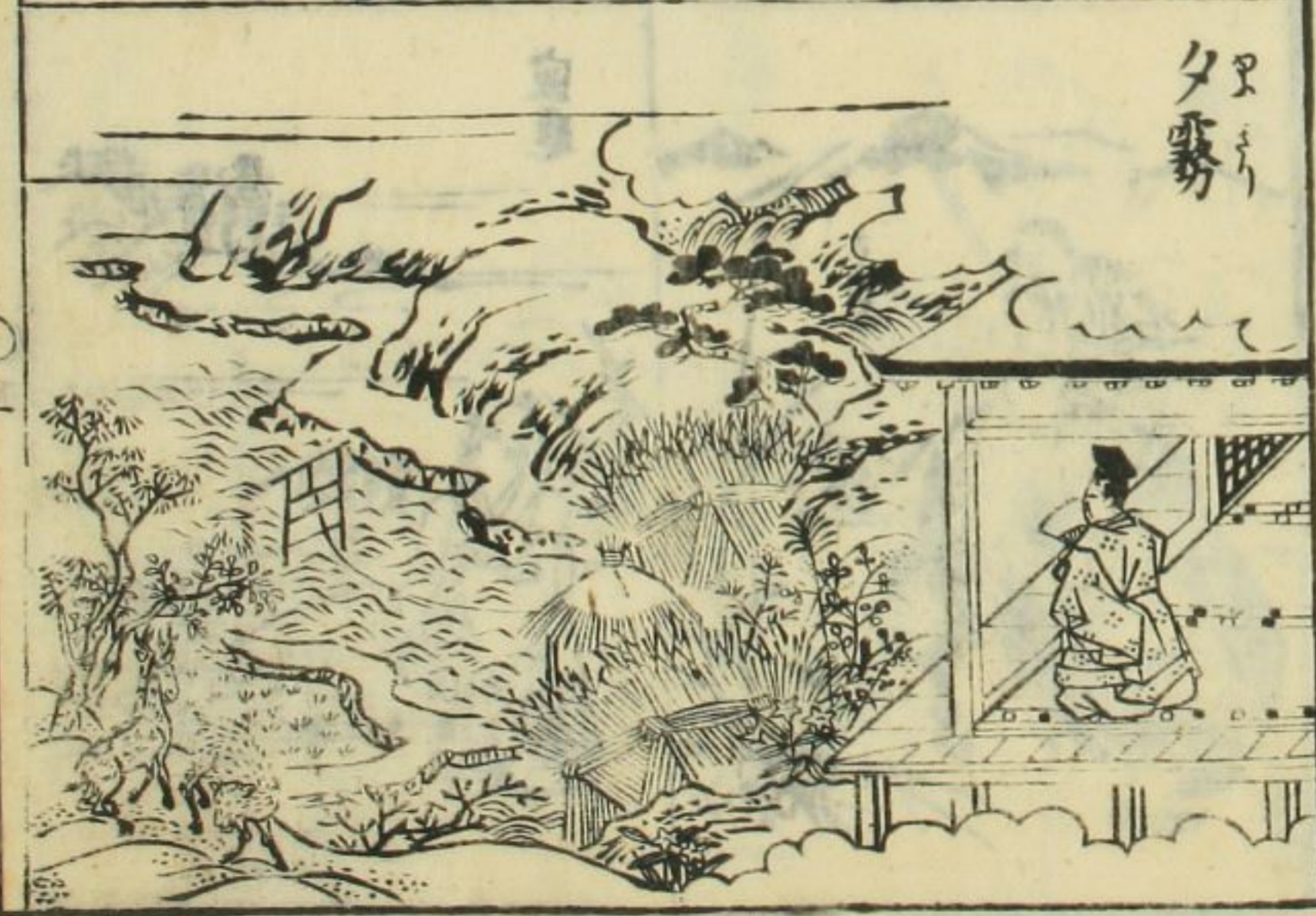
あつては
あつては
あつては

明石



明石

夕霧

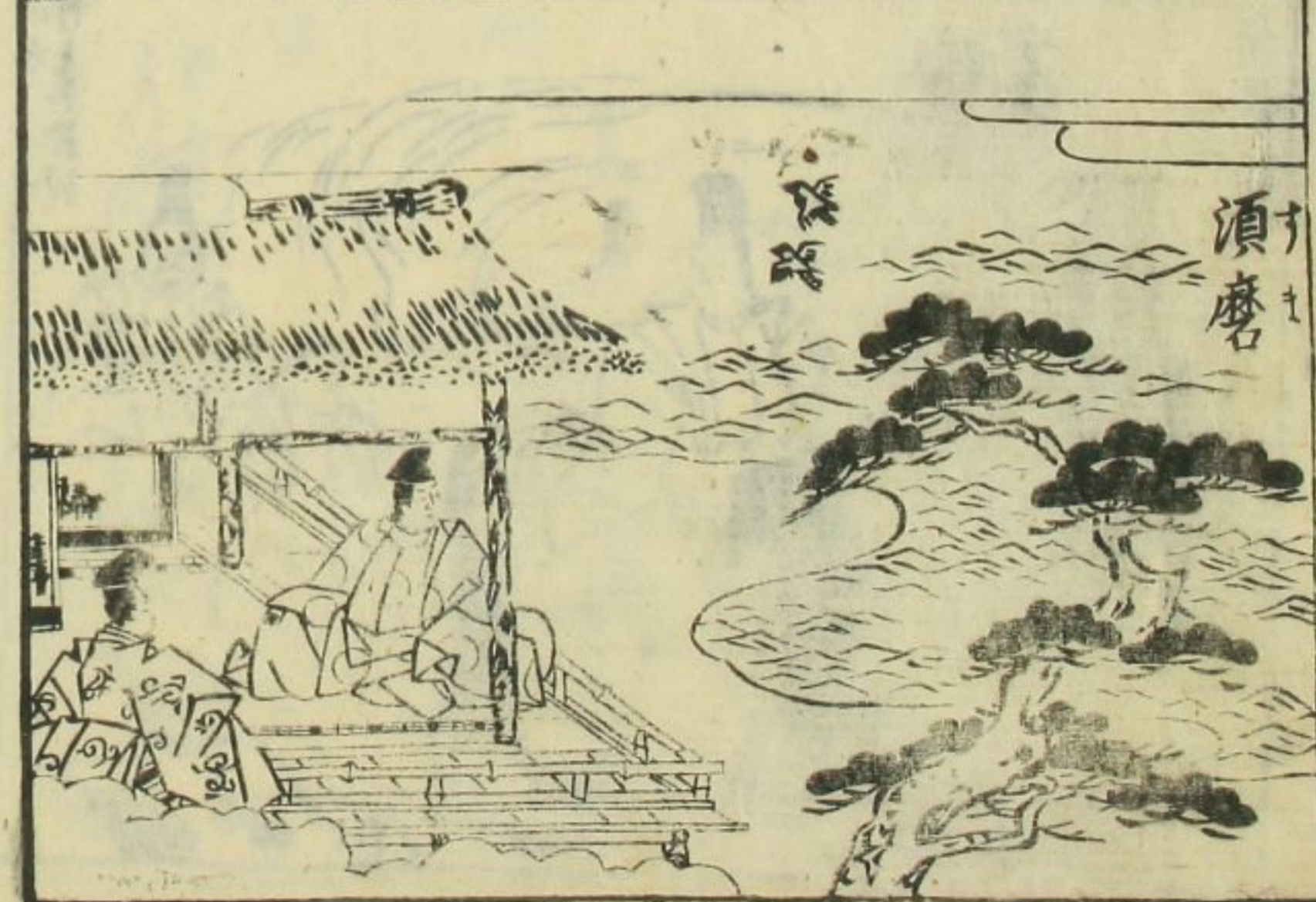


畫卷之三

夕顔



須磨





賀茂競馬 (Kamo Kyōba)



朝引 (Asaiki)

三保花屋

三保

新編大分県史

三叉 (Sanjima)



定家 (Sadamasa)



西行 (Saijō)



三郎 (Sanrō)



寂蓮 (Shizun)

雷公



土虎光信筆

萬歳



探出筆

放下



柳栄筆

腕推之截



腕推之截

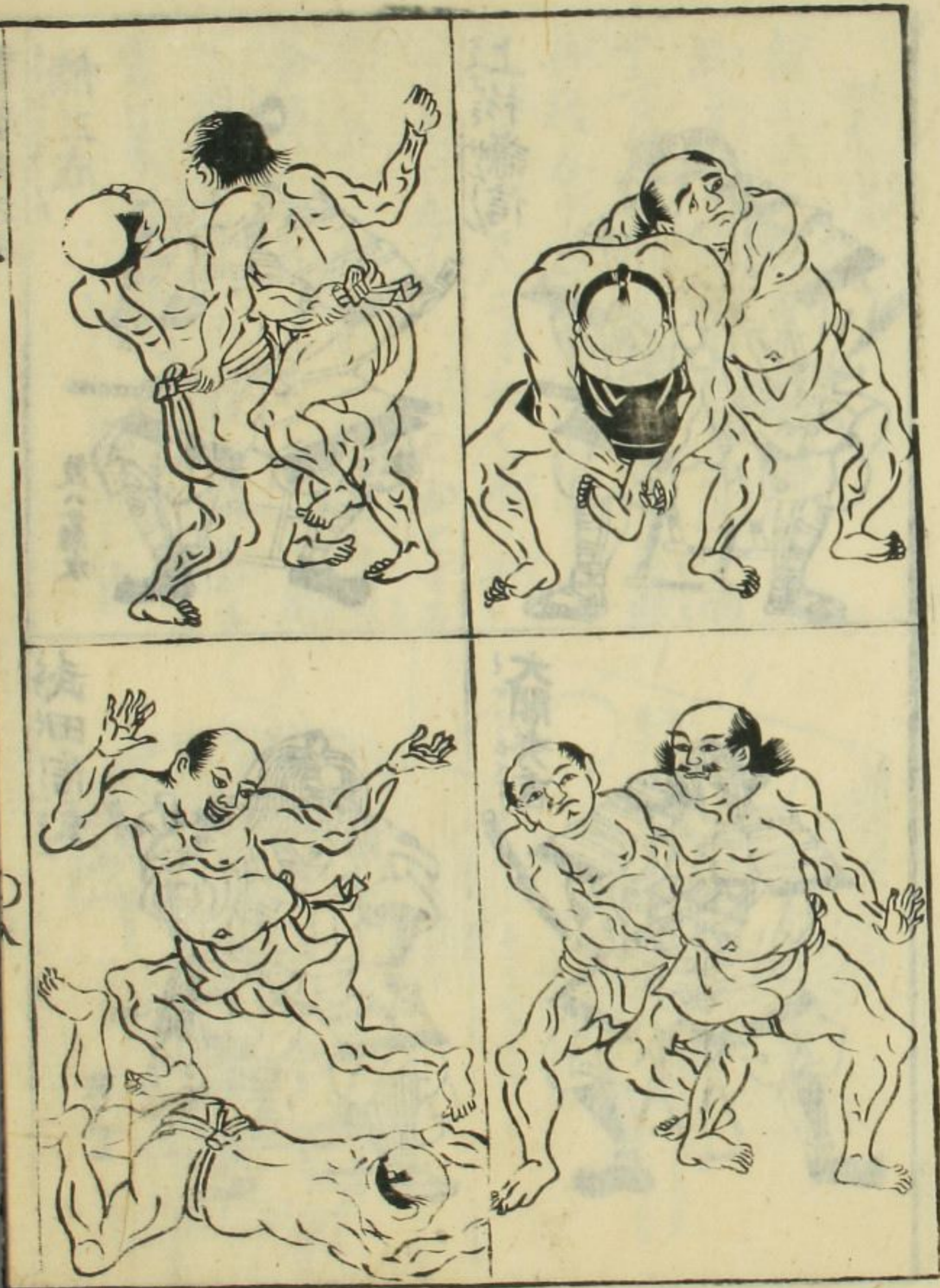


碁盤標



曲太鼓





相撲

畫卷之三

七

楠正成



紋ハ菊水

上杉謙信



武田信玄



紋ハ菱

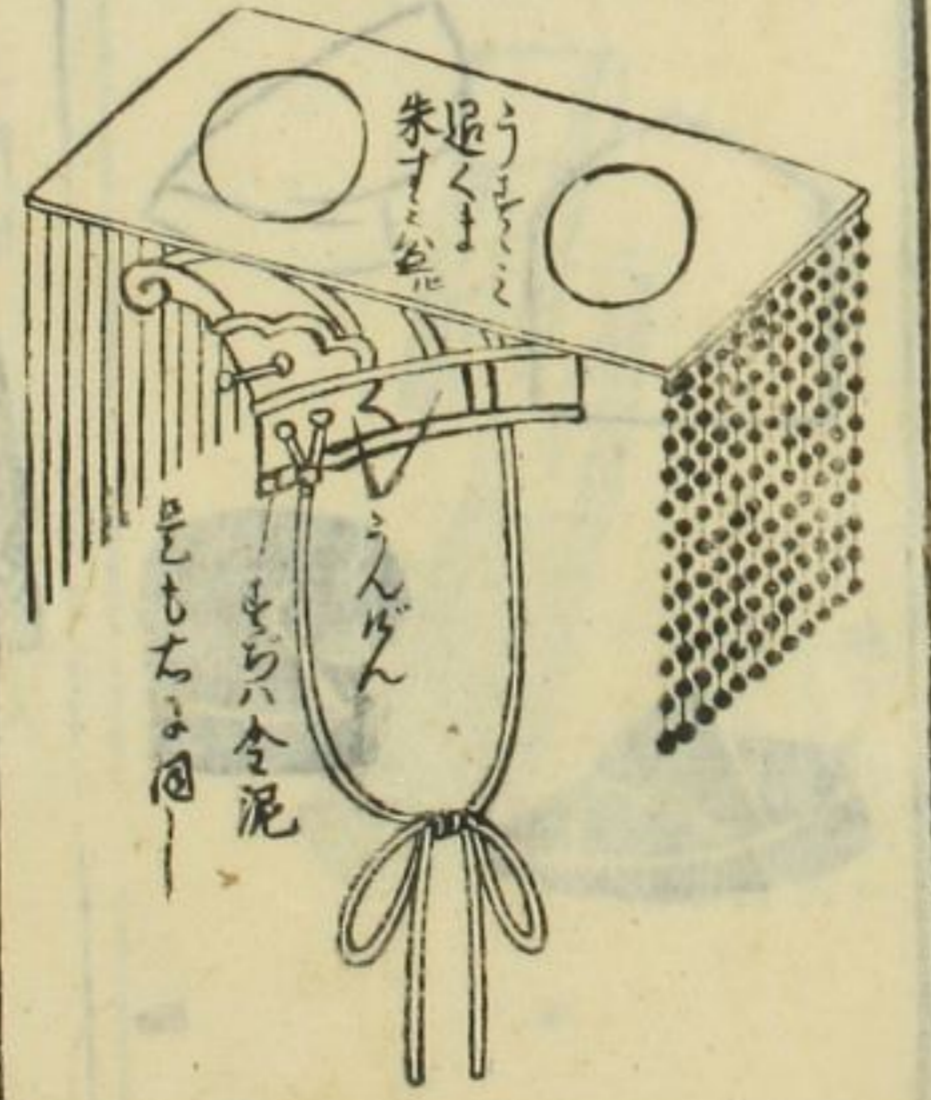
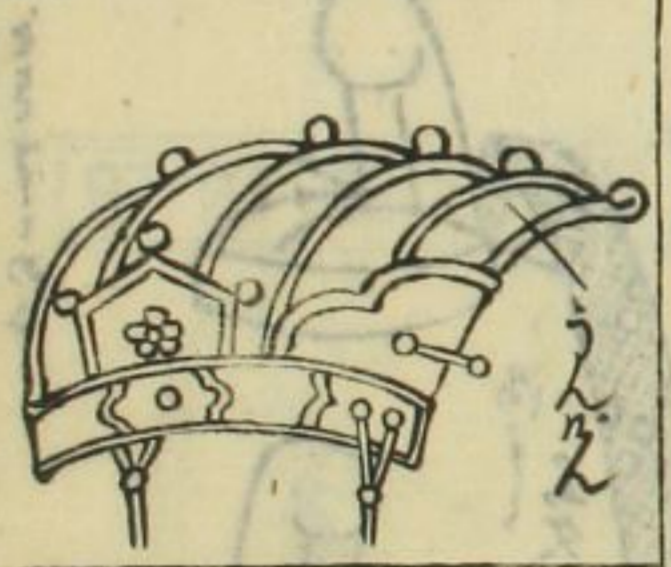
大關秀吉



冕冠

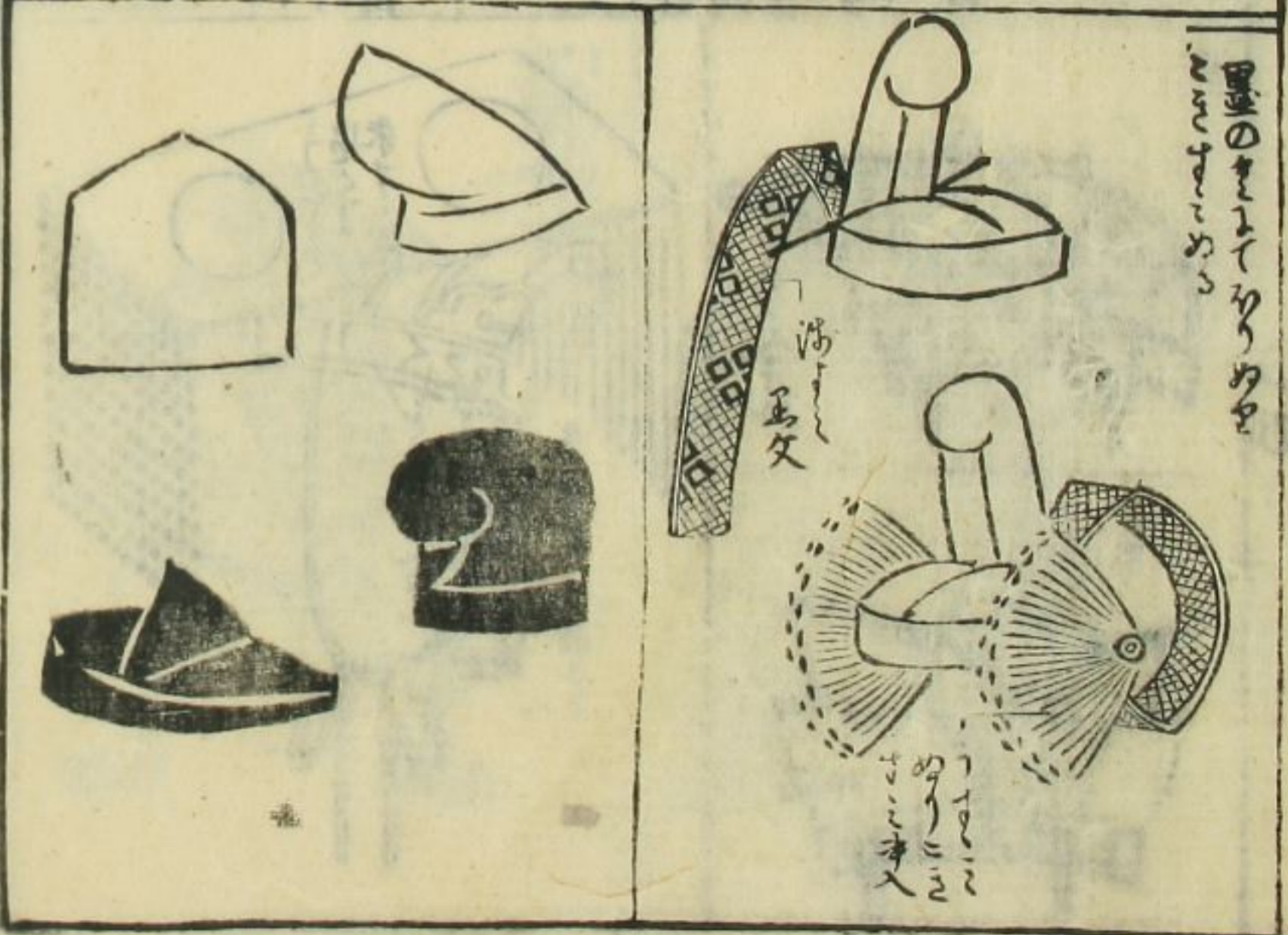
天子の冠なり

板と以て作らば及は櫛路を
密る是と流と云十有二也四時
十二月は法る礼記天子ハ玉藻
每流各十二玉玉の間おと一寸
流の長さ一尺二寸密て肩は齊し
公ハ九玉九寸侯伯ハ七玉七寸子
駉ハ五玉五寸天子の玉五采朱
蒼黃玄白よりりて下り周
て復始ふ公侯伯ハ朱白蒼子
男ハ朱緑白流ハ古り



冠 日本

古ハ織物縫物多シ天武上ノ皇
 宗承流塗の紗也之者以髪と帽
 物と巾子と云其後子云る物を
 羅と云そ及子云る物と櫻と云
 亦支那と掩物と緋と云色と
 貫く物を帛と云
 烏帽子
 紙といふ制衣流そゆる上た方
 折返とた折と云は後以著之
 右折返と五位以上は狩衣の
 時心ハ烏帽今世侍従以下
 の諸を以て綴ふなり



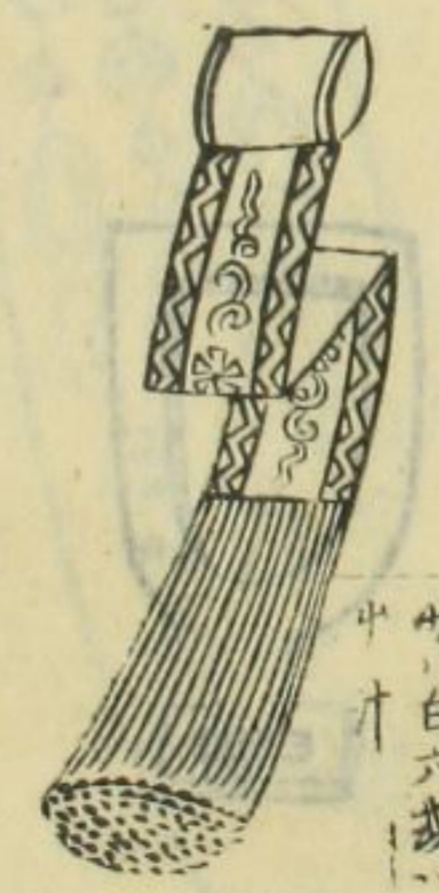
條帶 或ハ綾

畫家子平帯と云師乃曰
 申ハ家ノの紋とく或ハ
 蔓草とまへ古畫多クハ
 緋と緑乃彩あり

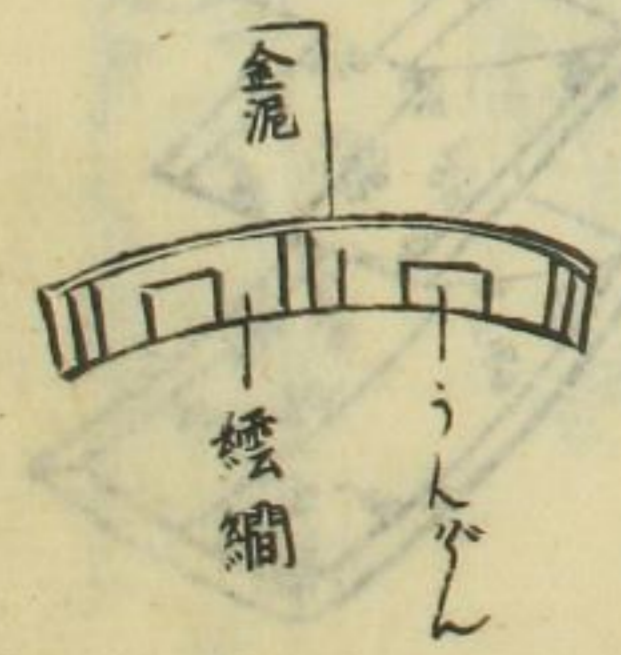
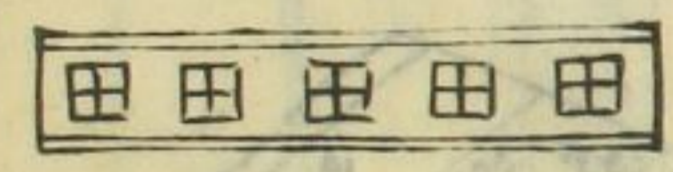
草帯

平常ハ紐子通して帯ハ
 各半きよの角まで四角切
 て縹つを是と稱と扱と
 凡て公の御共ハ紐子通して

或曰金

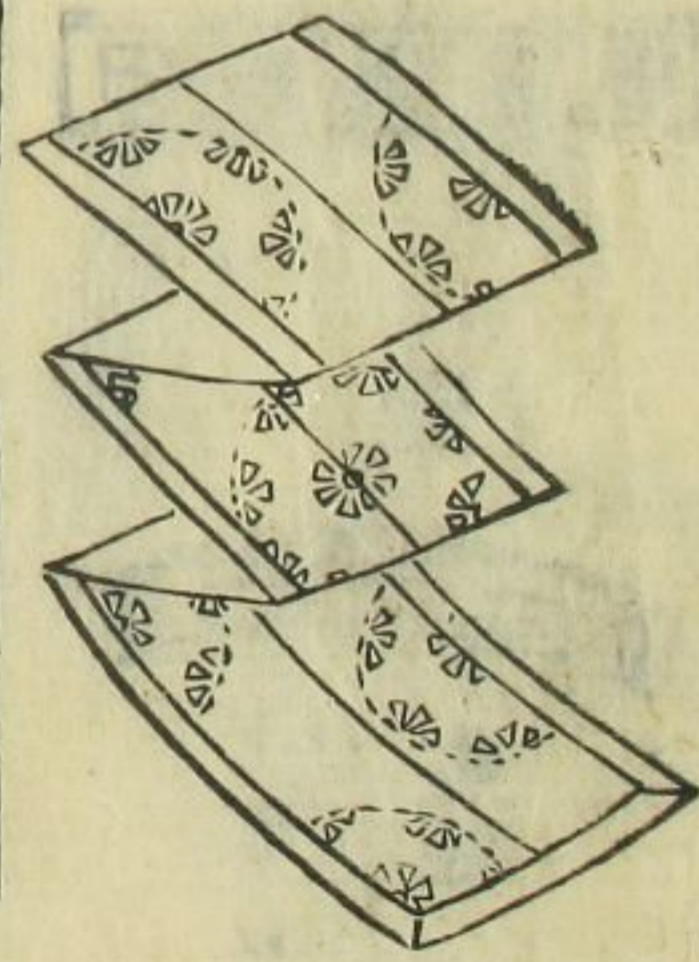
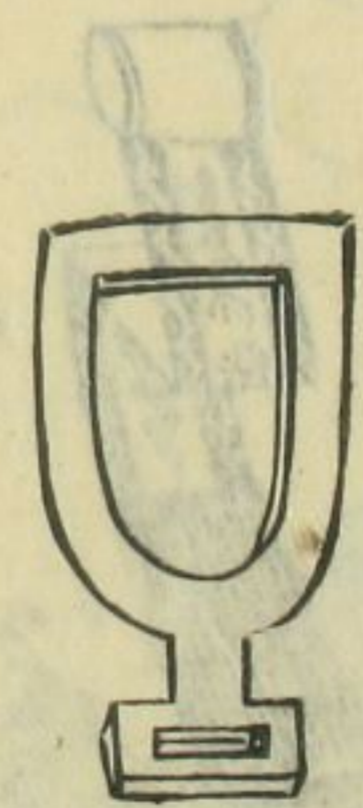


地之の附ハ
 わさぎ、烏虫
 或ハ金、緑の
 竹、白、六、或ハ
 中才



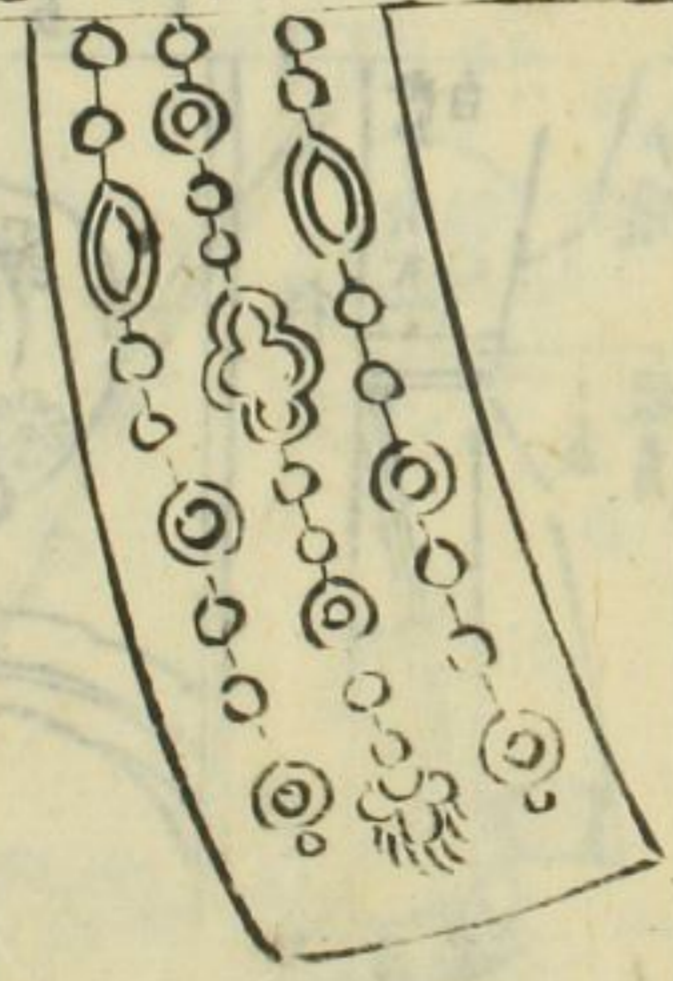
裾 きぬのちり

古畫多く蛤粉と以て洗ぬり
 同く括或は退ゆり曲と
 消し銀泥と以て紋を著
 して裏必寸肉色。袴ハ蛤粉
 してぬる。襪泥と章と
 虫石席或ハ鳥と云ふ
 方心曲領ハ三才圖繪
 見たり。ふん漬くぬる
 おれく
 括
 括



腰被

夢彌曰今の裙帯珠と其
 上より綴り壓て糸に。羅山曰
 裾の上に繫る帯なり。師曰
 白緑の具にて塗ぶふしの色と
 ひく圓巾ハ金と紺朱緑を
 をぬる
 紳 おかしき
 白緑具とぬり 蛤粉とそくら
 茶と或ハ全泥とを四色茶の汁
 還塗或ハ緋を 涙先の取うん
 けしよと一色彩色と定
 けしよと



天衣

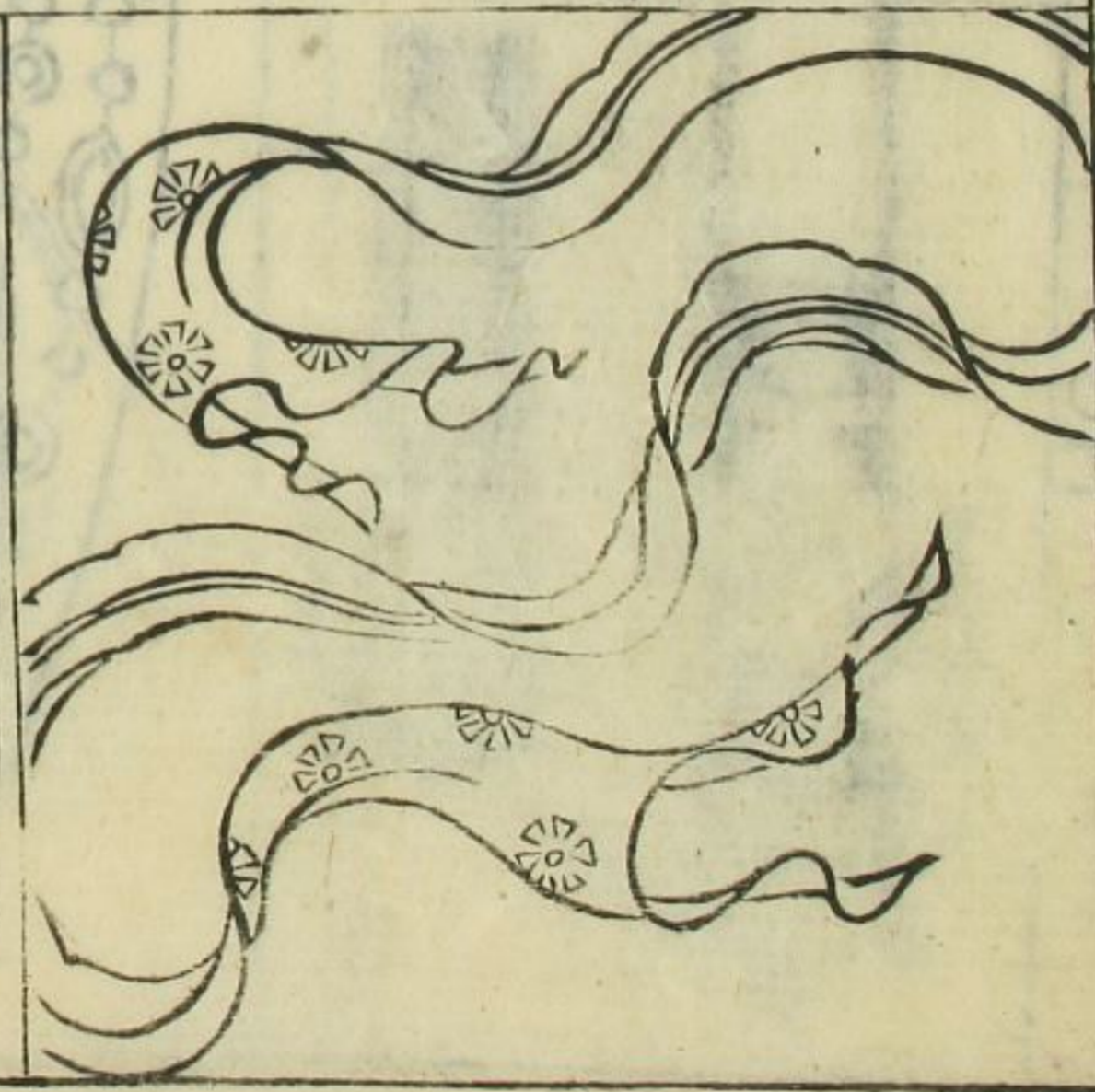
官方或ハ善落宮の有り掛
余カ帯レ知テハトイハ其
色ハくわり緋緑紫土朱茶
或ハわりとけタス一紋
合泥ヨリ

壁代

彩ハさこまねる色ヲ
漢宮を本スル一ツあり
あり

日本一ツも

あや



十二章

日月星辰山龍華虫雉六の
物ハ是ト衣ヲ給其序上
して下ル宗彝藻火粉米
黼形蔽六のモレ也ト
裳ヲ繡其序下ト云々
上教今ハ火と宗彝トハ衣ヲ上

○日月星辰ハ其照臨
山ハ鎮と取龍ハ愛也華虫ハ
文宗彝ハ孝藻ハ水草靈也
火ハ明粉米ハ養黼ハ断也
黻ハ辨也繡ハ絳帛と以テ

日月星辰山龍華虫雉六の



質とく白黒を文とく○黻
ハ黒とまると相次の文なり

襪

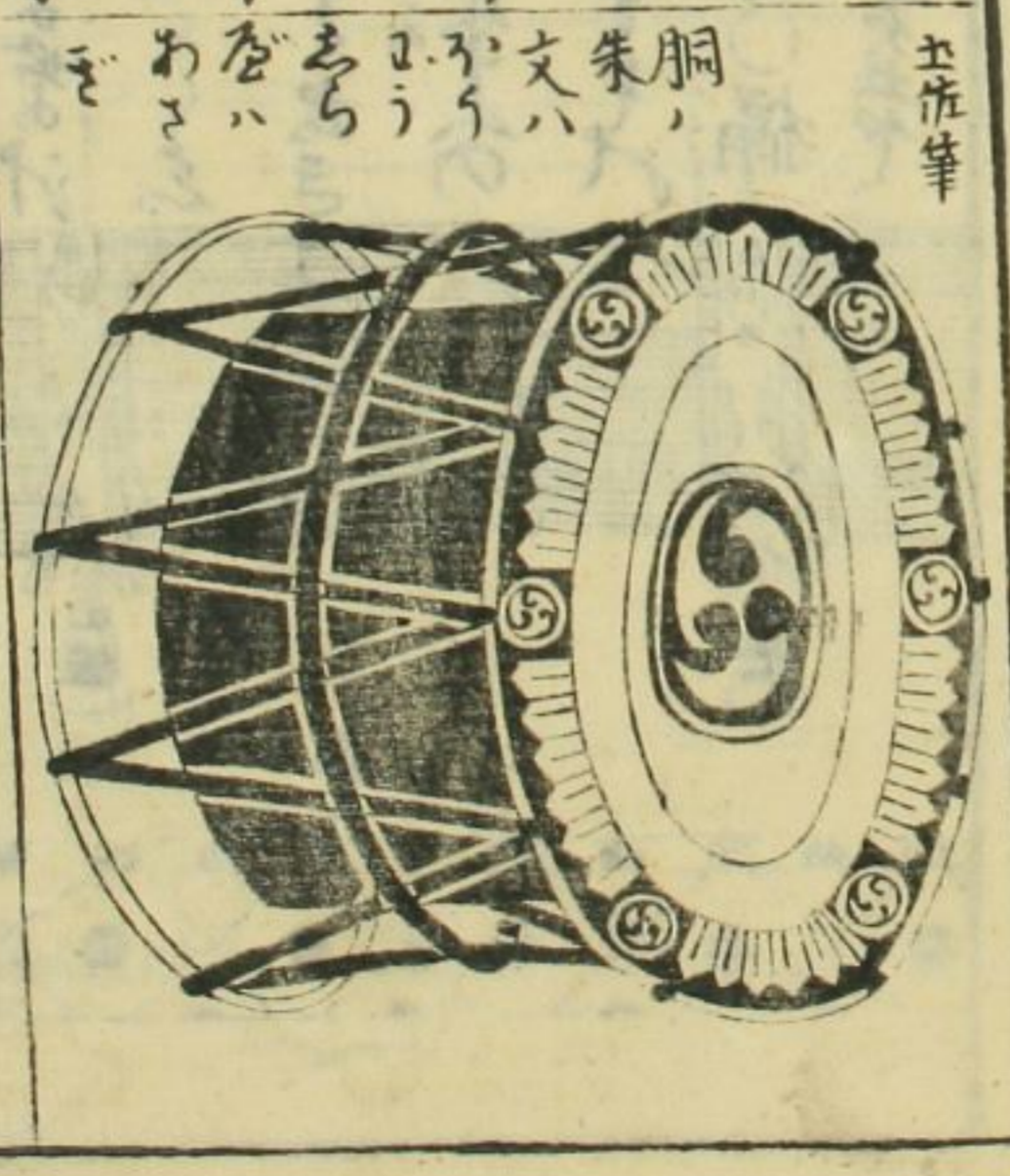
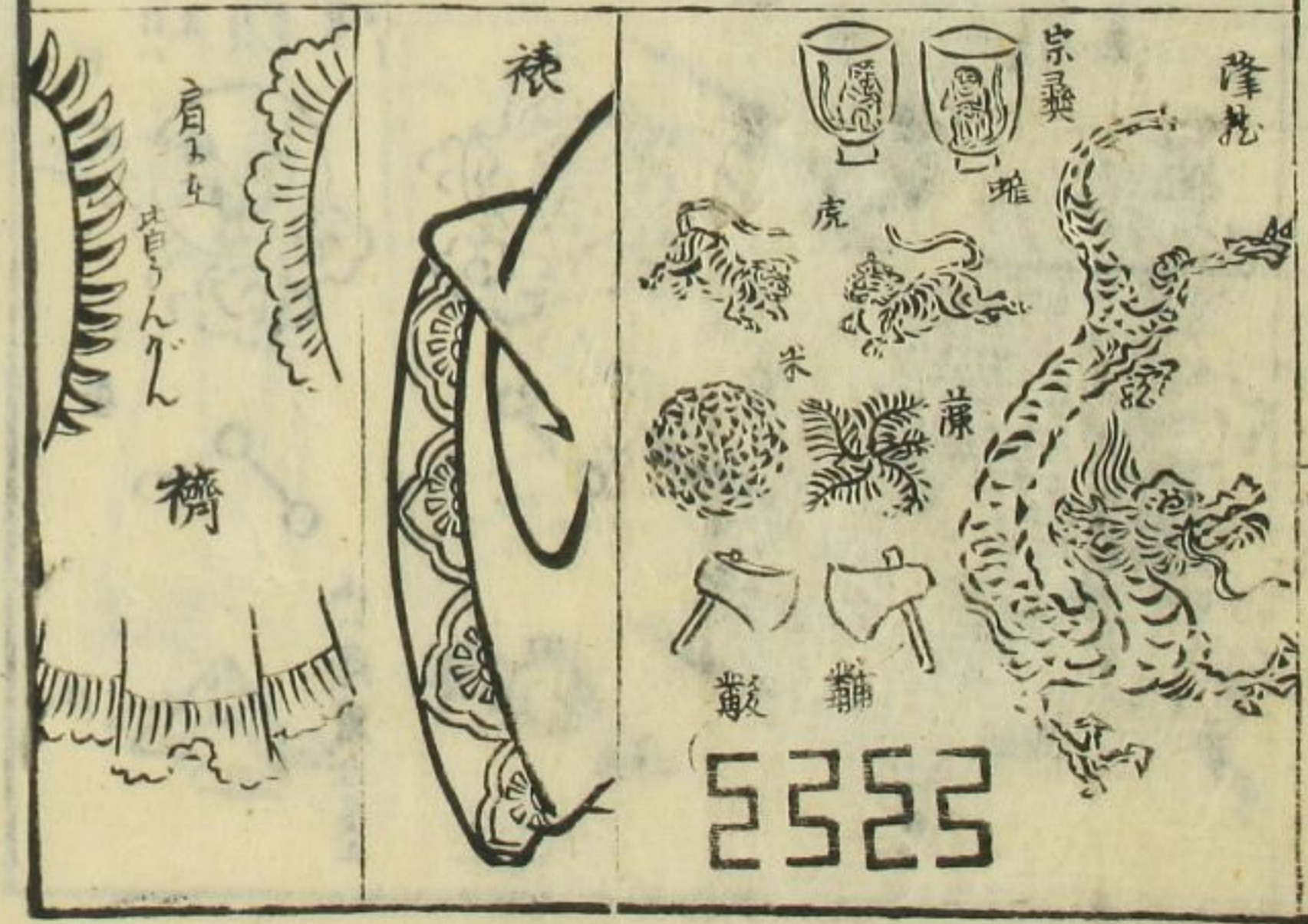
漢人の袖乃縁と或んともま
大概墨曲とわめてより或退り
ゆり又一遍つけ或乾澀紺まを
くる或全文まをなよりより
濟

漢人のすうに在ものど或ひあ
云と紺縁調脂具まをくぬりま
つらうまを括りんやうと或次まを
かたりごふん退くゆりけす他ひま
を二めをててく

○袴 給粉よてぬり銀泥
て帯をとう石帯或は帯
たす文帯 丹帯ハまをてま
○唐團扇 合黄土の曲
ふ又茶色は或ハ漆胡粉と
粉をまをさぬりすまゆゆ

○大鼓 敲鉦如意宝珠皮の取
ハ黄土具ぬり合黄土の曲と
敲鉦を以て是具とく彫ぬり漆
雲とて塗金泥とくか加ま
白縁具とぬりぬり帯のけ

畫卷之五

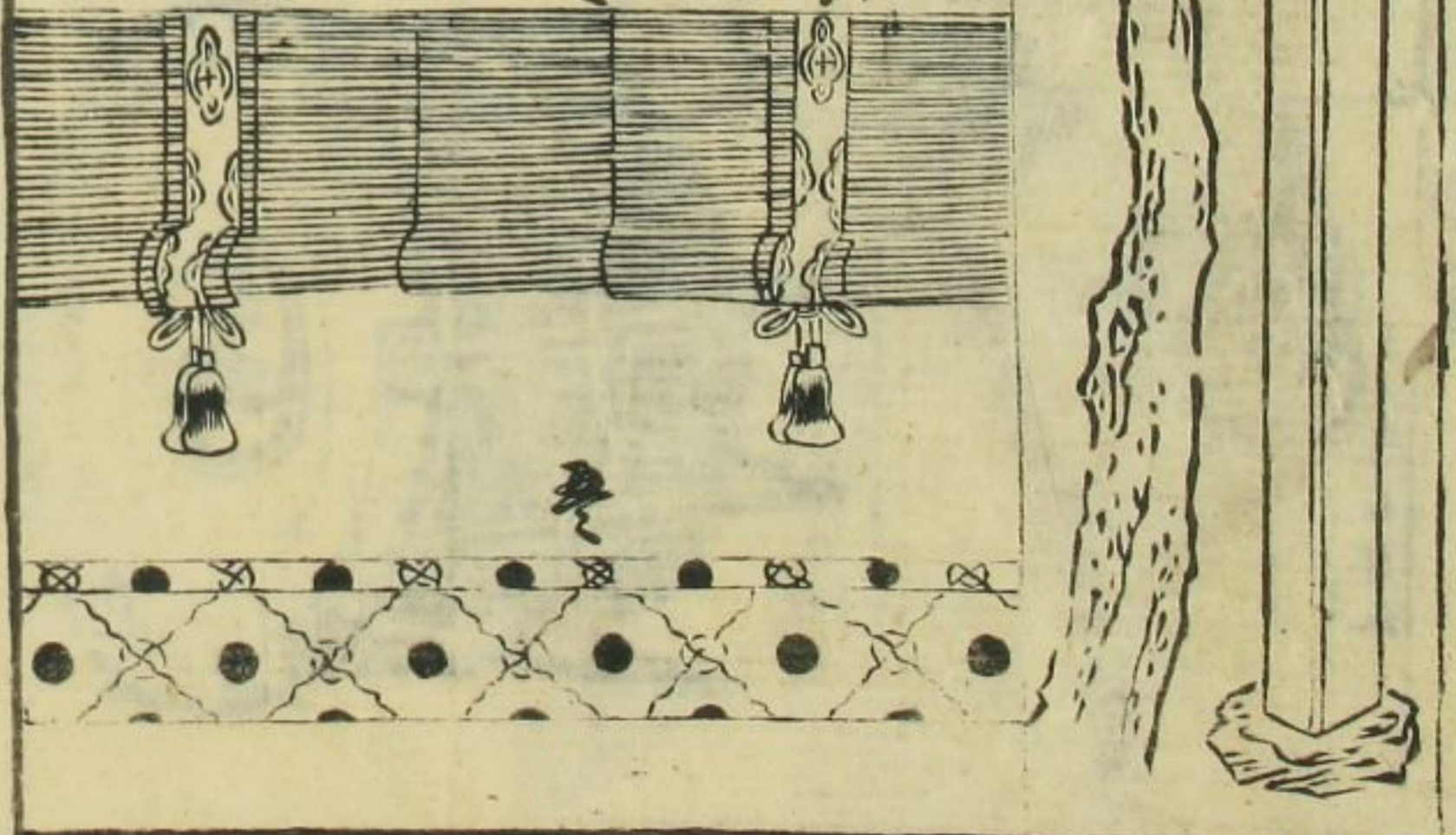


〇三

ふくまより胡粉まき拵
実珠何れもうんげんごに

七〇輻車比を白線よ敷美

女一加てぬる成白六より敷美よ美の
加すを不加に比塗れよ美汁
とぬる故を扱むらとにめんえりう志
こらと柱成美を車の液よ美やく美ま
是身なりぬる深き美ぬる挽本よの
総朱帯代ぬ仕よ出一帛いこすすこれ
方浅朱のぬる久成ハ朱美よん〇桶
こよん深きハ罰〇笏肉色成美共



色〇席緑或白線よ敷美

加塗線ハ比と胡粉よてぬる美支

と云成青海波と云成は美又云

狸洞た〇建具土具成合美共

朱すみあめと云こと又同

〇藁屋合美よ酒より朱すも云

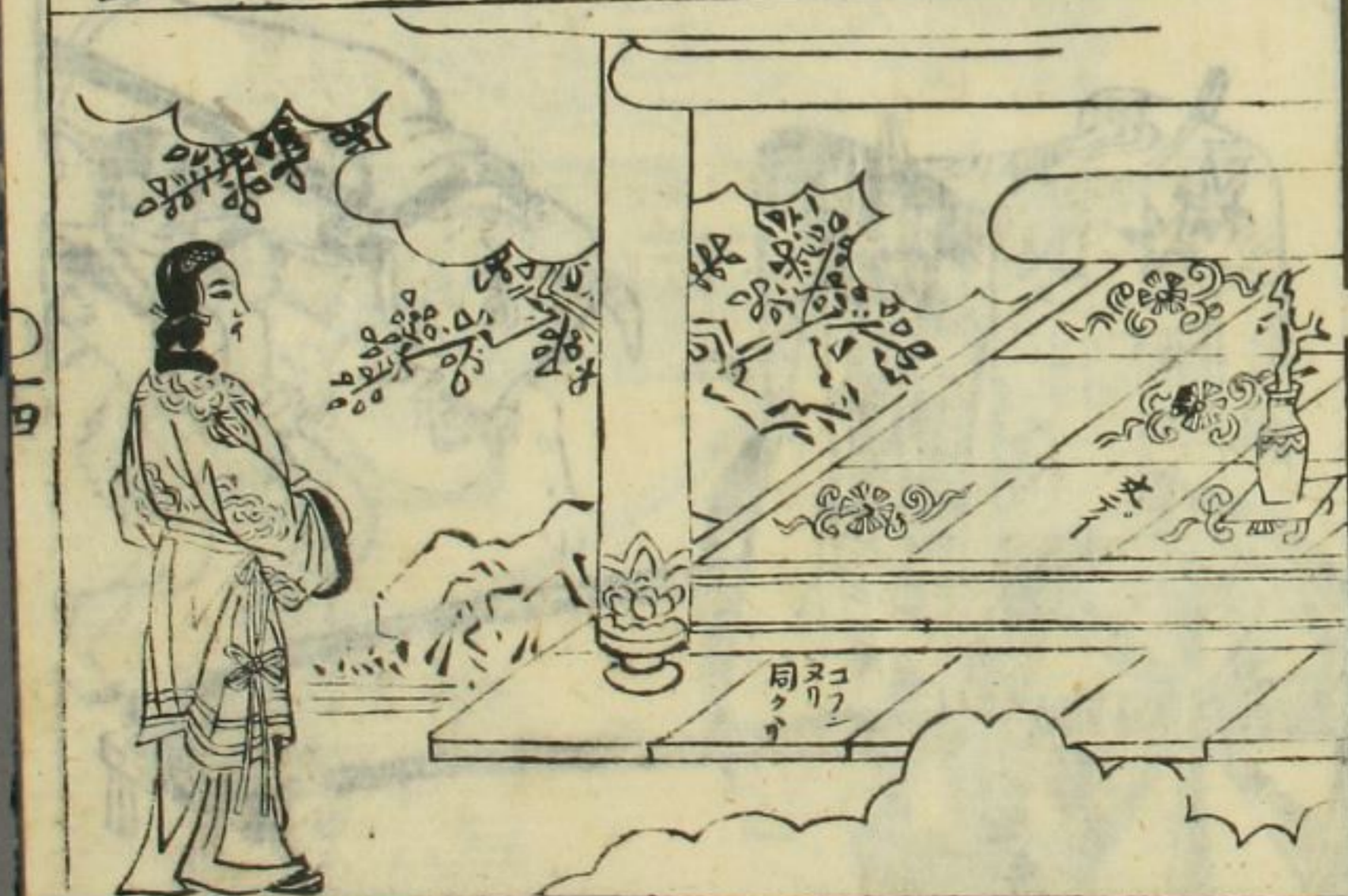
入る檐の周ハ點々よん〇瓦屋ハ

淡きまねわのらう柱成縹細

彩おとす一〇檜皮菅朱よん

みぬり檐ハ方下を筆又の如く

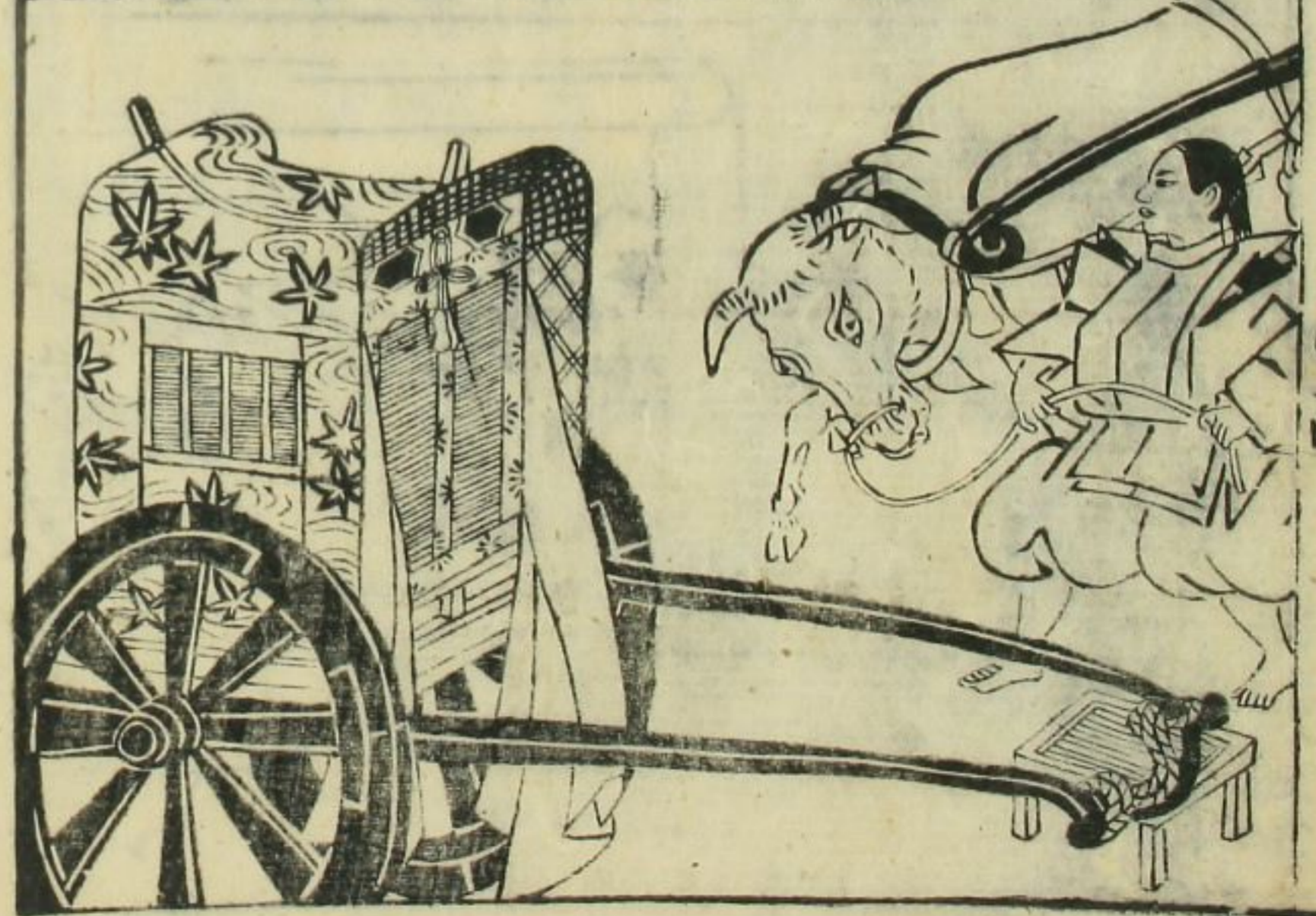
美よす一多う檐周ハ淡墨塗



○磚タタキ乃のぬくく去て間と隔て淺は基
とぬりとぬり總そう柄がら了らまま雲うんをを敷敷地ちとと涉わ
葱ごににああくく一一るるここににまま袋ふくろととああるる
或ある時ときららととぬりぬり胡こ粉こなをを拵とけけももああり

簾すだれ

地ちとと白しろ六む子こ敷敷美み少す加かへへ塗ぬりり
上うよよ二に線せんをを用もちてて界い尺さか入いりりととぬぬりり
鬼おにはは中ちゆう汁じゆうよよくくももままへへ一一線せん
何なにああもも塗ぬりり章ちやうハハ木もく瓜かをを外ぐわい
何なにももととままへへ一一編あみみらら糸いとハハ朱しゆにに
てて所ところくく竹たけ節ふしをを敷敷ききてて聖せい



武者之圖むしやのゑ



或ハ朱あるハしゆ

菊きくととららいいととええ
或ハああるハあとととと

拵とけけののよようう
美み土つちをを塗ぬりり
朱しゆをを塗ぬりり
白しろをを塗ぬりり

いいししのの上うへはは金かね泥どろをを
塗ぬりり或ハああるハあのの後ごをを

甲冑 畫家子描之彩、所のむけ多し。○緑まどぬり
 葉の汁、せらとと云。○緋青、よのむら、成、成、群青。○朱、よの
 調脂、福も同し。成金。○赤、青、よの、乾、澱。○黒、具、よの、澤、雲
 成、福の方と、赤、雲、ぬり、曲、け、す。○藤、具、よの、福。○蛤
 粉、浪、泥。○調脂、具、よの、生、成、成、脂、具、よの、同し。氣、成、脂、具、よの
 令、泥。○丸、澄、の、腹、の、革、よの、黄、土、を、と、ぬり、赤、汁、よの、成、を
 本、紋、の、中、子、朱、組、成、脂、具、よの、中、入、る、又、蛤、粉、よの、と、ぬり、輪
 と、星、い、ひ、と、お、ら、せ、佳。○曹、吹、返、と、眉、庇、い、黄、土、を、と、ぬり
 紋、中、と、ぬり、他、一、定、あり、す。○筋、金、多、い、泥。○菱、綴、り、朱、と、深
 して、作。他、す、その、方、よ、
 同し。○本、成、の、澄、よの、総、角、ぬり、膚、土、い、綴、り、著、と、ぬり

- 直緋成朱
- 紅周ハハ多乃
- 火成地
- 朱子ぬり小札乃
- 銀紅乃系
- 直緋成朱
- 紅

武者後背圖



○四、家の、外、の、源、氏、黒、平、家、紫、原、明、黄、橘、黄、也、一、家
 の、統、領、あ、れ、を、用、ゆ。○織、系、子、因、て、と、と、没、く、色、と、淡、く、名、を、
 稱、し、古、乃、鑑、ハ、た、の、脇、不、鎧、受、の、板、と、云、も、の、右、乃、編、子
 小、神、五、と、う、

○糸緋威 金銀の小札まねの糸 ○赤真威 小札まねの糸
朱あかのて 萌黄もへい糸 ○山吹威やまぶき 玉たま糸いと糸 ○金掬まゆ裳威
金の札しるしの糸 ○小梅威こばな 塚むら木ぎの糸を交る又白しろの糸
わしわし赤あかの糸と云成なり有あ二に反への糸を白しろの糸と併あ二に反へ
淡あざ紅こう梅ばい裳しん二に反への糸 ○卵たまご花はな威 白しろ糸いとよよ迴まわとと若わか黄わう
乃の糸いとよよ成なり白しろの糸と云成なり又上かみ二に反へ白しろ糸いと下したと淡あざ葱そうも
○白檀威びやくだん 全ぜん白しろ檀だん威 ○紫むら藤とう威 紫むらとと黄わう糸いととと並なら交ま
○藤ふじ糸いと威 淡あざ紫むら糸いと ○塚むら木ぎ威 合あ糸いとよよ胡こ麻ま摺すり
梅うめの糸と交る糸と云成なり又上かみ二に反への糸と併あ二に反へ ○鶴つる威 玉たま札しるしの糸
葱そう糸いと ○華はな草くさ威 赤あか糸いとの糸と交る ○黒くろ草くさ威 玉たま札しるし
玉たま糸いと ○空くう色しき威 玉たま具ぐ玉たま深ふか縹ひらの糸 ○玉たま糸いと威

金の札しるしの糸 ○洗せん草くさ威 鯛たい丸まるや 犬いぬ籠かご目め鏡かみ色いろ不ふ為た
淡あざ葱そうの糸又淡あざ紅こう梅ばいの糸 ○洗せん糸いと威 惣そう小こ札しるしの縹ひら又全ぜん
小こ札しるしと名な色いろ糸いと ○段だんと威いの糸と並なら交ま ○肩かた白しろ威 肩かた
頭かぶ威 細こ糸いとを草くさと糸いとのこ塚むら木ぎよよ交ま ○肩かた白しろ威 肩かた
と白しろ糸いと ○肩かた赤あか威 之これの糸を紅べに糸いと ○肩かた白しろ威 肩かた紅べに 肩かた二
反ふた白しろ糸いと裳しんハ紅べに ○白しろ糸いと威 白しろ糸いと一ひと色いろ也 ○品しん白しろ威 白しろ糸いと
玉たま塚むら木ぎを交る ○揚やう梅ばい桃とう李り 濁にご糸いとと白しろ糸いとを交る ○縹ひら葱そう 惣そう
糸いと威 ○間ま色いろ摧さい 又またこの外ほか間ま色いろを用もち ○縹ひら葱そう 惣そう
糸いと威 又また玉たま札しるしの糸と交る ○紫むら裳しん縹ひら 惣そう
○金きん裳しん縹ひら 全ぜん小こ札しるしの糸と交る ○紫むら裳しん縹ひら 惣そう
○紫むら裳しん縹ひら 惣そう ○玉たま裳しん縹ひら

紺 五折して下二折を紺にして○ 霞裳濃 何の色もて色
次々に下を濃と 太くお板敷ありといふとくく死に
違ありに

総角 色おし朱をてゆり丹をてすらし紫の平をてす
主位の裾は色んとと塗同具をて飾り

強腰當 黄玉をて塗朱をて括らすらし平をてす
扇 片面に地と朱ありて金の月輪をせし又片面に金を
して朱の月輪をせし要は丸して中は腕黄の穴を

緒の長六寸骨八寸或十六寸にお乃上骨の平骨ありて
透あり 透の名を祿こまると云

旛 白糸の製製作の中帯と同くは或は白糸帯の帯を

赤旛の時に木地と羽の腕黄の緒乃穴とと串のちりり二
寸までわく魚一筋舟の穴の串は寸急より七分或寸法
ハ紫草 菅浦草 葱草乃類をびつ寸三分縁黄の法ハ
赤緒也 色定らば紫ハ軒 約寸一長三寸六寸五分
柄より三寸二分まで括す魚一一方乃短ハ一寸二分

菅浦旗

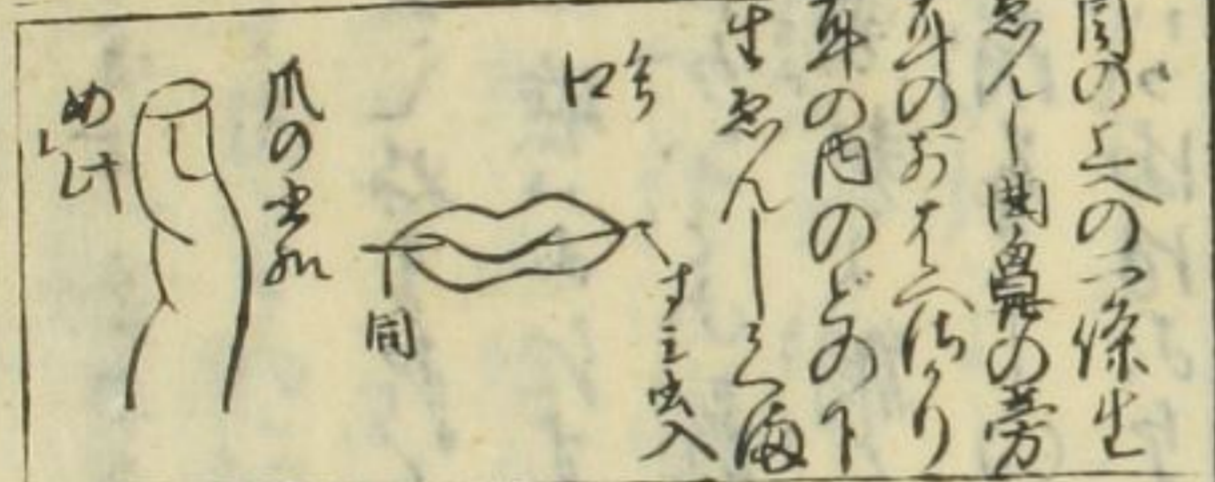
端半代 小兜の威は旗をつらなるるや赤帯と漆部ハ
紙入り 描く是と旗繪と稱は先鶴亀松竹を描く鶴
ハ淡墨をて虫おしんを用ひて、其の淡墨曲よりて
凡のわりと陰馬、わとよれく一とよみ平瀾、吉人形と
描入り面ハ具を塗はるを併合黄土をて曲より朱を塗

よてくろくこ鑑武者のくちの若持社中とて深きぬり
れも一筆づつよ事愈々或膏を氣無脂とてぬり或ハ
赤うあいらう雪の水陰をうて赤く紅菱綴と
始より角孔をあけて墨丹を丹を入る皮のあ
らうやとそ外本彩のあうす画一筆も赤いハ
つうひまう

人體 好色 春日畫之法

師の曰れ人の疥曲ととれよ其形を圓く
おかり皮膚をぬるを面具と稱しお少人丹と若玉を
加ゆ老人ハ若玉をより一申年ハ丹を増壯をハ粉と
よは赤のさめめくはより回くくる或ハ赤すこと毛

とありあかふ
といふ人をぬり
生るんぞえのよ
とく漬してとま
まをんぞよま
格す小四のあはぶ
少ハ丹少生腫
が加てぬる面



く海と丸まの鼻の旁耳のあ髪胡のわる処耳の内喉の下
胞の上下顔のくさると依とハ唇を紅丸ハ○髪ハ玉具を
ぬりて又深きぬり取と曲りてとと毛をとするハ白髪

淡墨を毛と筆とを淡く染り深くと筆入る○僧の
 頭淺墨とわりしは乾澱をくる或は淺葱とぬる○月額
 わるは白色○は朱と白りよりゆるく中とびらく下らけに
 又左右の畔より墨と一筋筆入○月鳥珠と淡墨とく書
 又淡墨を縁を固めてその中心に眸を付る筆よりハ深
 墨と一筋して墨し好まぬくせいでいり鳥珠の弁とふ
 りんよてせぬる上臉ハ白にすこしてせく下臉ハうす
 よー○眉官女かとの軟つらう眉とするこ桐麻の油を
 紙燭しろうに貼て陶器やきもの軟な網あみを付て乾らる筆を以て淡
 とつけ周を掃消はきをー○美今の面吾家の定法あり
 鼻はながそく上臉うへまへハ油あぶらはふりより及實あり下臉したまへハ筆

くさけハ鼻の半より耳の方よりあてこむ小く鼻とは
 との間も遠く志す軟よりー○唇くちびる肉多よてぬる
 莖の如くハ朱墨と掛回しくく油よりく軟電頭ハ朱の
 女の色よて曲りく軟○唇くちびる肉多よてぬる生るん
 小て曲りくくる或ハ透脂臭あじハ生るんトクも用ゆ
 婦女の老若ハ隨くこ色をわく異より尻の上より
 横文一條をすへー○陰毛淺墨よてぬるよれす
 よて細毛をすへー○盡精液おらん或ハ浪泥と利ゆ
 ○春畫を必十二尾ついでよ定るこハ茶色獨断ハ天子ハ一
 十二女と繋る十二月ハ象ぞうとちよらる

畫卷全卷之五終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

畫筌卷六

目錄

毛邊紙裏紙打樣	礬水之法	毛邊紙假張之法
粉本紙續樣	燒筆	裏燒筆
念紙作方	蒙筆作方	朱印色之方
箔推方	節作	矸子振方
彫塗	殺塗	退塗
經綢彩	括端	繪帛張臺方
		泥引之方
		隈採
		碁盤割

板描畫法

繪絹

墨

筆

硯

紙

屏風押繪

屏風緣寸法

屏風色紙短冊及畫之貼樣極秘傳

表具寸法定式

表具作方

腐粘作方

屏風張方

鰓尾寸法

緣附方

軸物卷切方

掛繪三幅一對之事

同二幅一對之事

同四幅一對之事

大橫物之事

柱隱之事

卷物結方

三幅對秘方

掛繪可入渡事

同床掛事

同見方

同緒置方事

同床掛礼

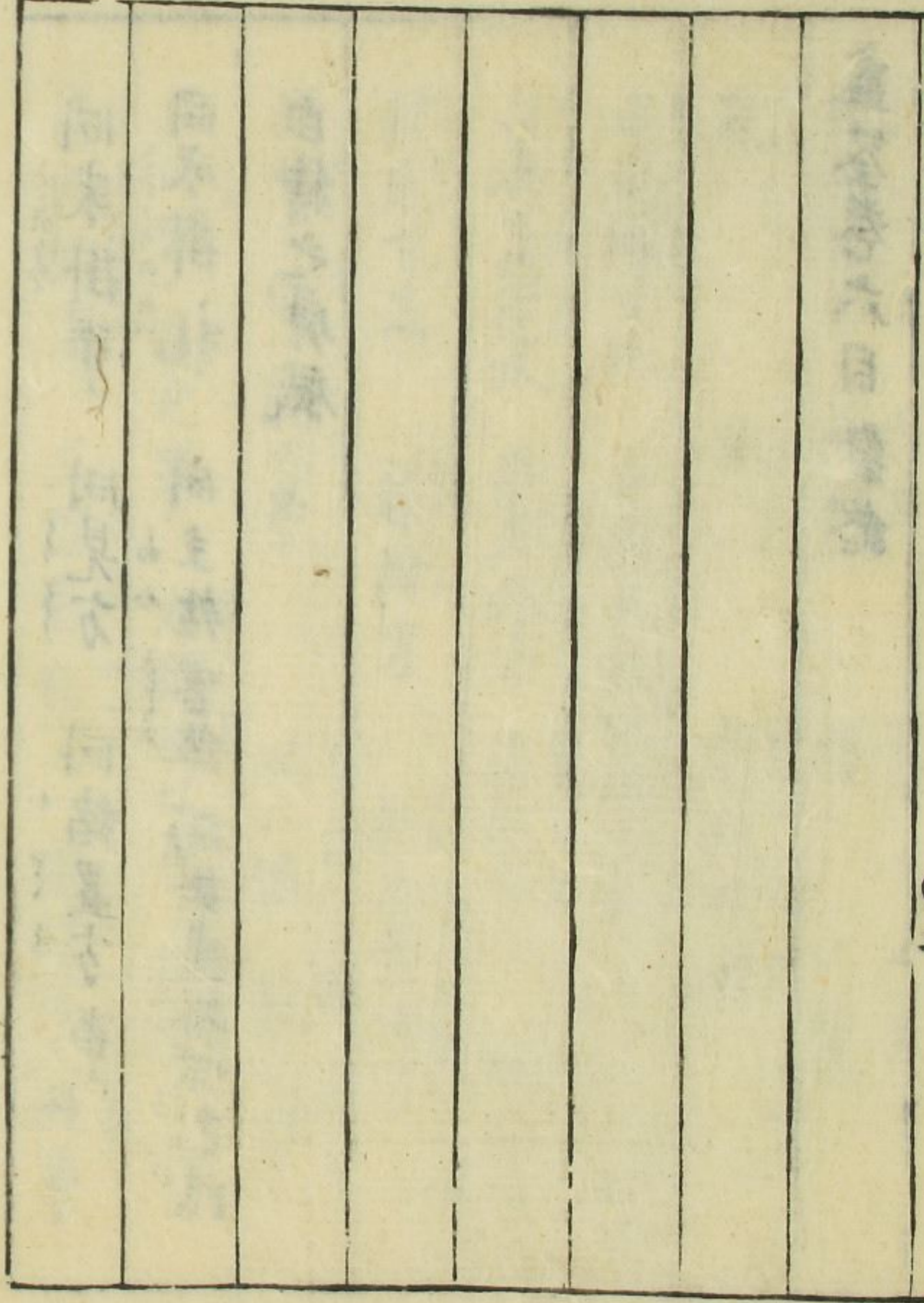
同主位客位

同掛畫掛字包法

白繪之屏風

畫筌卷六目錄終





書畫全卷之六

雜類

毛邊紙裏紙打様

魏前直方

林守篤 編輯

先裏紙（うしろの紙）の付る紙をわし羽（うしろ）重にして浮石（うきいし）まき紙の端と磨切てく（とぎ）い
 る紙の加すく一方ともよれ此（こゝ）で粉麩（こな）の粘（ねり）りて後（うしろ）て表とく（あ）ま
 りたるの裏（うしろ）り紙（紙）とわし副毛（たもと）も毛（毛）邊（へり）紙（紙）と又（また）次（つぎ）紙（紙）とに
 の横幅（よこはら）比（ひ）て切（き）て用（もち）之（）を板（いた）の上（うへ）にたらしめて表と下（した）りて副
 も水と付（つけ）てしつくとおかけ又（また）水とあしめて水とあしめてしつくと副
 毛（毛）邊（へり）紙（紙）を取（と）りて表と下にかけたるの裏（うしろ）り紙（紙）を右（みぎ）平（へら）乃（な）左（ひだり）紙（紙）と
 又（また）返（かへ）してたるに粘（ねり）り付（つけ）副毛（たもと）も又（また）裏紙（うしろの紙）の左（ひだり）方（かた）の上下の
 角（かど）と擦（こす）りて左（ひだり）腕（うで）の方（かた）に引（ひ）いて裏紙（うしろの紙）の表と上（うへ）りて横（よこ）り引（ひ）いて

書畫全卷之六

らめ粘と行する所一重曲せて其う紙の表を粘と引て上下の
角とあえよあえぬ神れとたり此上は被りけて上より水つけ
て粘りしむしむし傳へるに力おせぬ皺にぬより極分
手ころと紙に臭いと此田の面よと紙を粘るを均に引く事
ぬいさひひらるる事と巻をせて又その紙もぬれぬ光り
打を洗流し地の面へ挂て乾く事と後焚き水として日用よ
使へし一紙屏風乃上張る地とせぬして用也

焚き水之方

黄明膠 十石 明礬 五石 水 五斗 先膠と水中に泡して
柔く成しつ時器物の中熱湯と合し手と捏めたりとまを膠の和
らり時明礬の粉と投て攪まを冷して及刷毛とたりしよま引へ

又地してぬれりる時まき裏の屏よ粘と付て紙は
らり付て中に風を吹合らよし○たうしを数し水之合
ふ元又紙多ハ七旬屏風よハ又白よし○又方膠十石
明礬六石 ○圖繪よ及ハ膠をまき 焚き水一冬ハたりす
多くはるるかーとむし

毛邊紙假張之方

膠地しつたうし一の表よ水を引て返して裏のまきと粘と
付て又まき中に水を引てあまよして引起し紙は押白水刷
毛と紙と粘りたる事他紙と切て裏紙乃紙の左に膠の間に
付て及利刷毛より篋と入る事張て後にはるる事
公を引へし

粉本紙様

美法紙よ地として堅くきりきりとまきこ一二夜もまきこく
どけし目と強く鞆伸ここれとねまに板入とよ金他のり甘

焼筆

臭植乃木と若乃く削り小き方に火と付厚に火を
滑用の又紙を包ても滑之を焼筆まて糸と怪く描て恰好以
足合々好又毒く付てぬまてけし掃落してまきよて筆を
描致て后ねまて終るへ一畫史に於筆とあり捨木を用也

雲焼筆

描くと思ふ冷中の裏に焼筆と付て是を画紙の上まき

上よりねまきよてんりバトよりつりりきとて描く

基盤割

是は大なる圖と小なる又ハ激を圖と大よせんときハ時必
足合々これものこそ時彼家とも罪のくくより描紙とも同く
割て其家と人合て字とこそ罪の才方ハその時の大小は必
罪の教ハ同教ますれこそ是と基盤割と云地採乃時よすりこと
地採い或ハ扇風の畫かをとんでそれを小く紙に書り又ハ小を
見て大よするか底のくや

念紙作方

良紙とも面紙とも云らる先榻原紙を柔に揉み敲を耐炭
と細末し酒を以てぬれと煉りたぐとして削毛をぬて揉る

紙子付て目より描へ紙の上は炭粉の貼る方と下は
蓋を垂て又その下に粉本と重て竹篋にて推写しそ下
写しとて記して描し是と念推と云

蒙筆作方

猪と寒中の米泔を浸し毎日水と易く六七日及てぬ
鉄槌にて打碎し和けて筆代管の紙を擗りて苞て用ひ
陰の岩樹花葉を筆より妙なり

朱印色方

艾をよく揉て寒中の清水を曝し目より又水と水
煮も白にかし朱と蓖麻子の油と入て交合し朱と
本みてすり黄色と云て用と底子沈むとされ又芙蓉底

胭脂を加へる方とよ

滴推方

屏風をどに滴と貼るは地子丁子の灸湯をぬり
海羅を引て滴と貼る滴の厚さより少のへて紙とより
油と淡かき塗て滴の上は蓋はを候ついでわらるは是とよ
のり引る上に推付るは滴著るを換へつふは是の一方より
綿を入垂て是より推し下る時に指を寄し又地子合
土をわけて金滴を貼るを重くをわくは又粘と引て二重
を貼ると

公酒盤作方

鹿皮ハ鹿の皮と利田方みおすやどの板此面子奉書紙
とのして重くすると草子で海を周と粘りて付利め

漏切方

漏盤の上に漏を一枚ぼくをて竹刀と以て十字字子裁
ぬきて拂ひぬき池を師子入くろと

師作方

籾の節とま切て大中小の用をうきくよ作垂て垢の
大小は清てお熱の目乃筒よ入て振く

砂子振方

地子海つ提を引くことに砂子と師よ入てありきを垂乾くか
時常し或ハ古紙ヲ振毛字は細いころもよく

を押しとろし熱水を海にひきず

泥引方

金泥と強むけし舟に地境とするこい時お金の比引く
せぬころあ

彫塗

先ハ墨をぬきぬきとぬきと墨れと掛らるといふ墨と生
て彩とすのこ

殺塗

没骨と塗し先ハ墨をぬきぬきと墨れと掛らるといふ墨と生
ぬきとすのこ

退塗

墨色のこまらうりわし引通てぬるよこし胡粉とあつ時必を

隈捺 くまい 曲のよまも目

是しに乾らるとする時わけて一方とこれ滑くしころ時と
二ふ拵たりまつのあつる毫と漆筆といふ

纒綯彩 えんじょうさい

是に同じくこれ強具まで次第に濃ぬるとし和の宮女の
袖口かき留重間よりすくじ縋に朱重間の時にし胡粉ぬり
ぬりけしつさに肉色又濃肉と丹朱とあひぬるなり
何れも皆是しは準として志新會

拵器 しよき

凡此ぬりしと端と拵と多の同きを用るは陰の卑知と

拵らり又胡粉のゆるまの表のゆるまに拵ぬるなり
淡くも深くと拵に淡くと拵らぬして少くは

○朱丹肉色燕脂具黄土具藤黄具褐以紙の

生多しよて拵る又褐と黄とい茶もてもく紙淡葱
使えて拵る緑青の草緑或は白緑緋青の群青胡粉
は同きよて拵れ

繪帛張臺方 えいひょうちやうたいほう

帛代大さの巻つて本と以て四角は作るこそ巻は張付の
みは是紙と藁く切て巻又其まは飯粘とぬりしよて
帛とら付て太の紙を粘と付て帛のうへは貼てよし
乃方膠地をよてまじ彩をよするよの地ぬりと帛の

筆の方より整へてぬる。さらばは、色をぬるのや。一、まゝうらうら
よる。こ、地とす。時、粘のこに、けれ、と、強お、う、て、あ、

板描畫方

膠と竹目、明石、粘、水、を、米、を、入、て、地、と、し、て、ぬ、り、を
煮、去、具、よ、く、ぬ、る、人、紙、を、こ、の、地、は、大、さ、う、ん、と、塗、り、ま、す、又、こ、こ
お、あ、ん、た、ん

繪絹

糸、目、お、ほ、う、あ、り、て、斤、織、く、も、流、白、う、て、漆、糸、を、こ、こ
墨

こ、ち、絹、の、制、を、い、ち、や、り、か、す、地、引、を、用、て、ぬ、し、和、の、制、を、
新、ち、ら、い、新、は、え、澤、あ、り、て、よ、う、粘、す、と、こ、こ、る、膠、を、

あ、り、て、あ、

筆

毛、お、り、く、根、つ、ま、う、て、腰、の、つ、う、く、毛、を、拵、て、割、る、こ、こ、

硯

此、紫、石、青、石、よ、り、長、門、の、赤、間、名、狭、の、宮、河、う、り、出、る、が、よ、し

紙

毛、邊、紙、の、官、紙、を、以、て、上、品、と、い、ふ、れ、と、紙、を、紙、と、い、ふ、と、ら
さ、る、も、の、よ、う、こ、こ、地、お、ほ、う、は、淡、紫、赤、や、り、ぬ、り、白、色、こ、こ
と、昔、ぬ、り、あ、り、拵、ぶ、る、也、

屏風押畫

こ、下、と、い、ふ、紙、の、押、畫、紙、を、屏、風、の、一、間、縁、よ、り、押、し、ま、く

一方よりせむくゆるを三つは別々上端の下をさしむ
他この寸分上下に加へて一換の寸法は細より世に
計りて左右より又此端乃て一枚は入るの寸法と
同寸ありて堅へり此方を換くするなり

屏風縁寸法

五丈人の時縁乃て厚さを寸七八分は小縁は
外から三分と寸と二寸四分は一人は縁一寸四分は換
八九人乃時二寸七八分なり

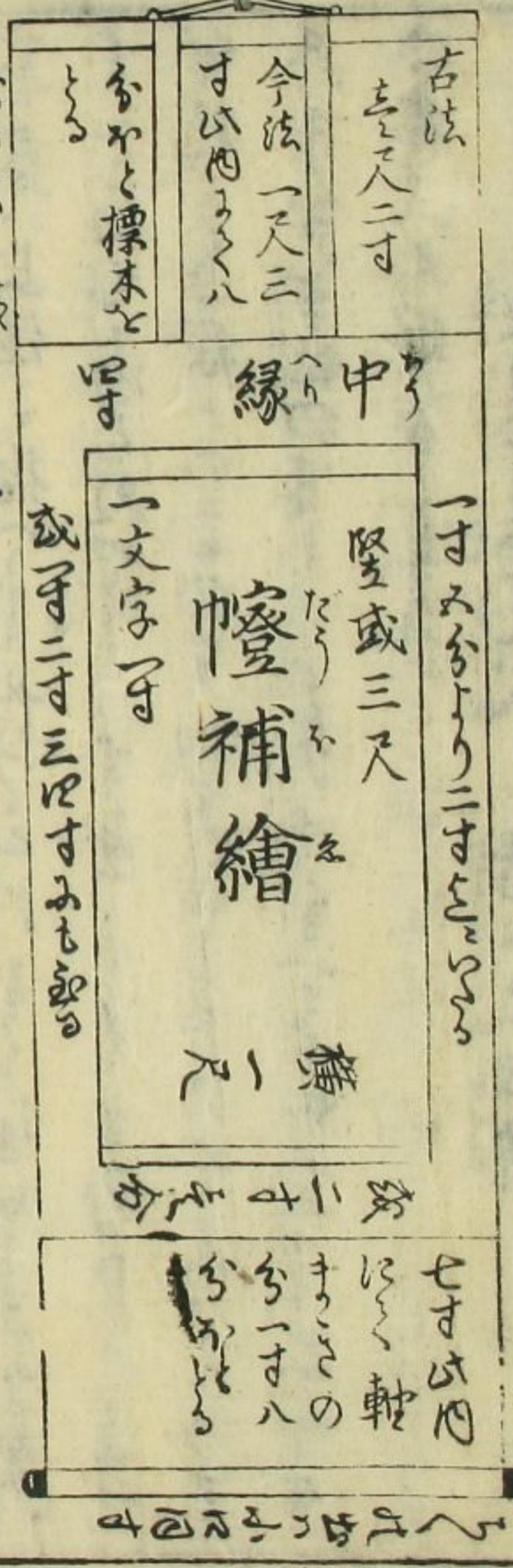
屏風色紙短冊及畫之貼様極秘傳

色紙を定めれば短冊と定むた右と見合へて押し是と
角と云は方角と定むるは又此の寸法なり

押をききと云は川六ツ等もをわけて又云は七ハ半と
いふ事ともいふ事いふ事いふ事紙短冊は寸法畫は
をわけてもいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
御製の前陰に書きたる御
墨畫は上位は推へて下は川なり画ありて
寸を極て遠くぬやうに寸分をすの寸分を
白札と云は紙の寸分を定むと下の寸法は寸
乃ち分を飯の寸分と寸分を加へて
の者は大秘事なり

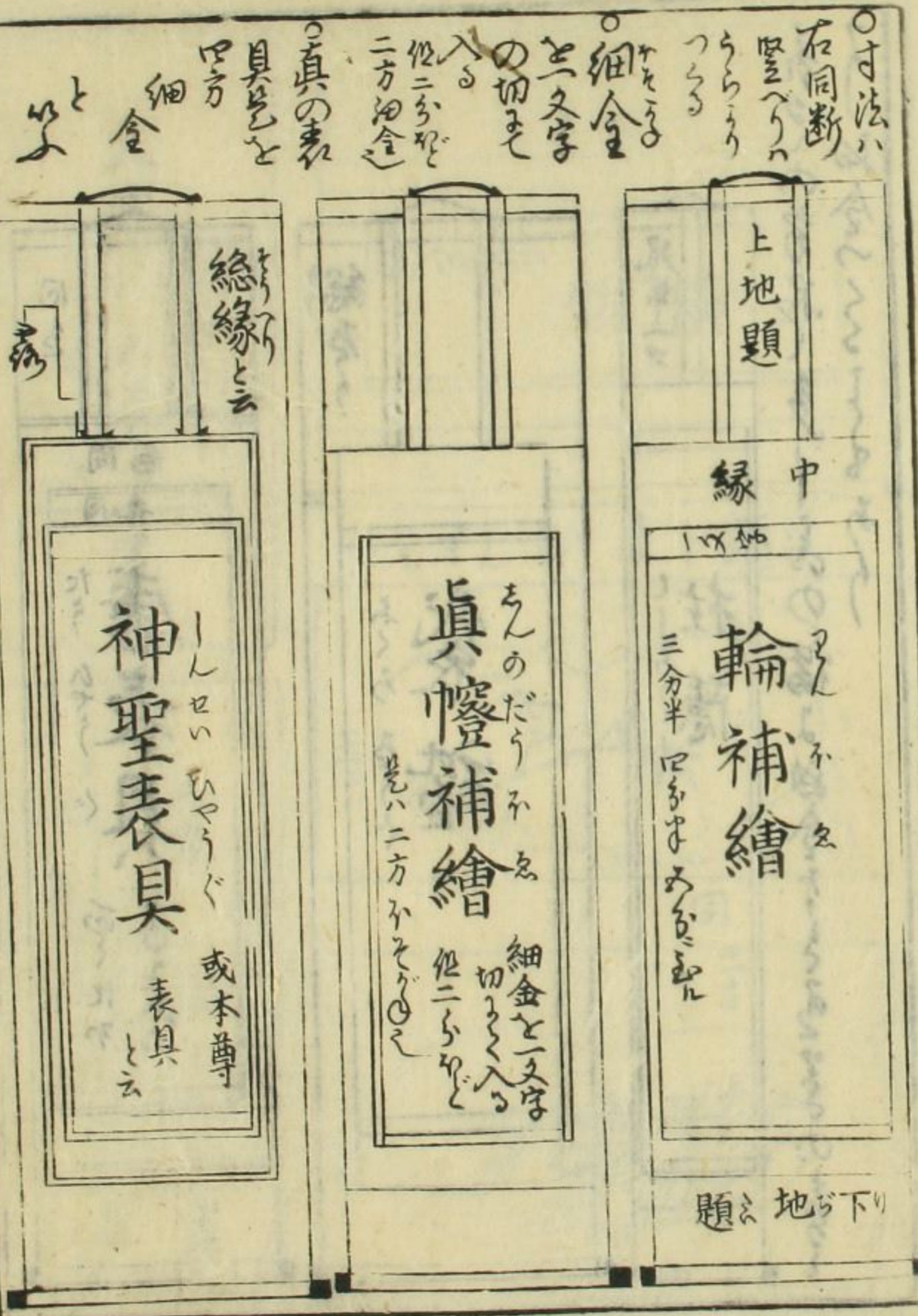
表具寸法定式

祝工之秘傳



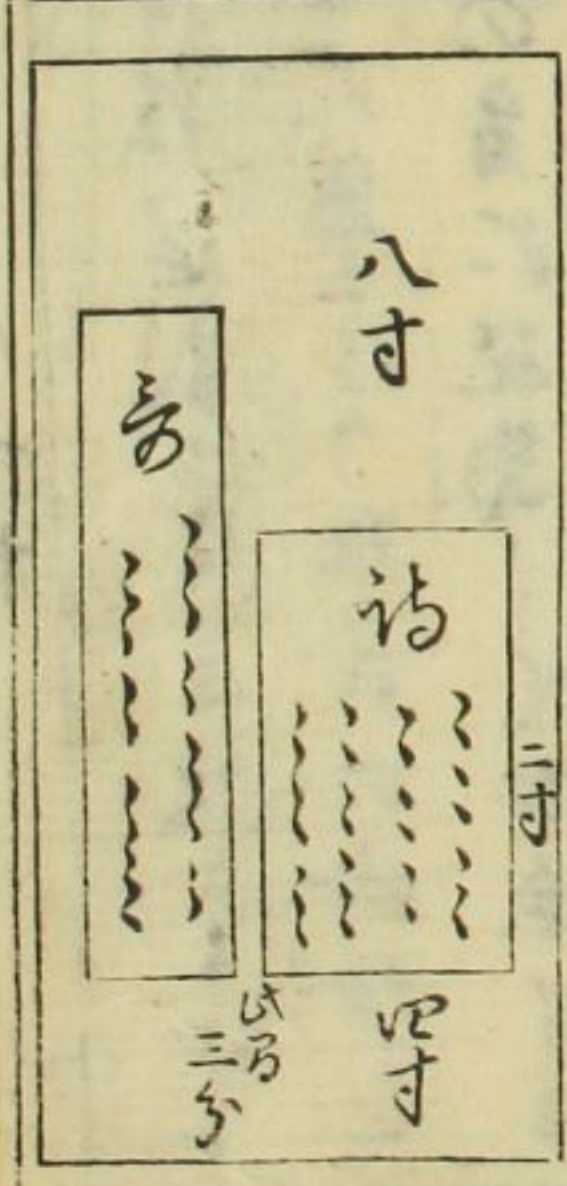
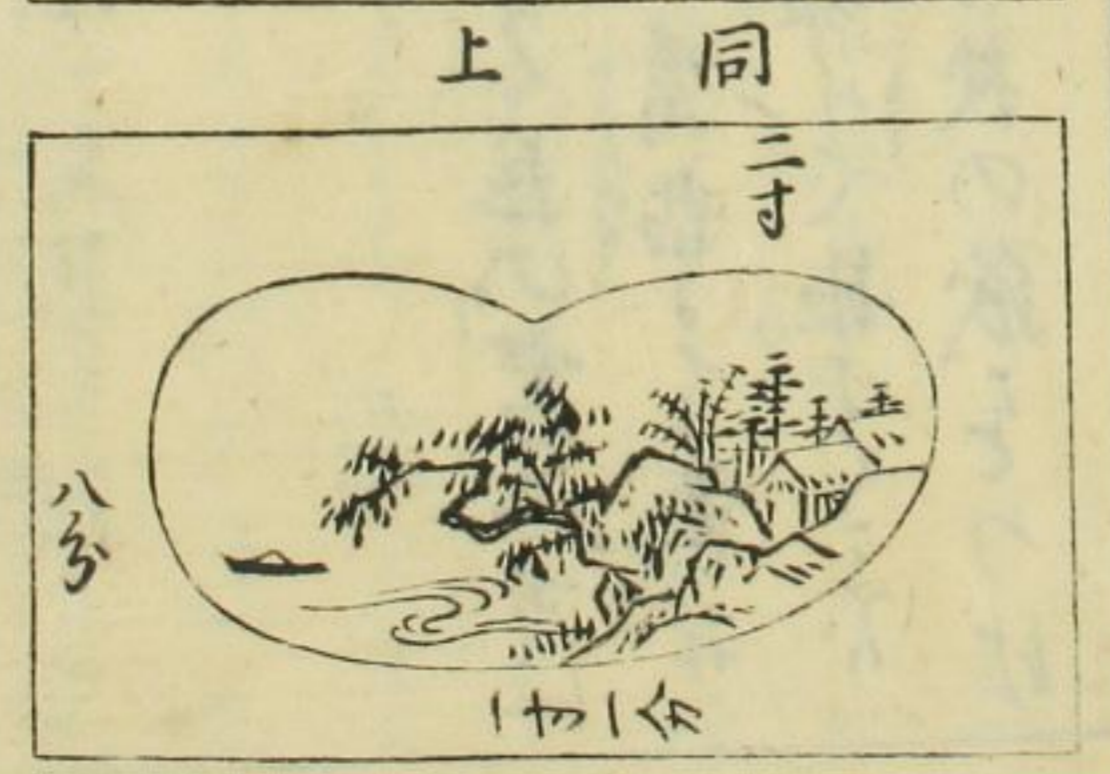
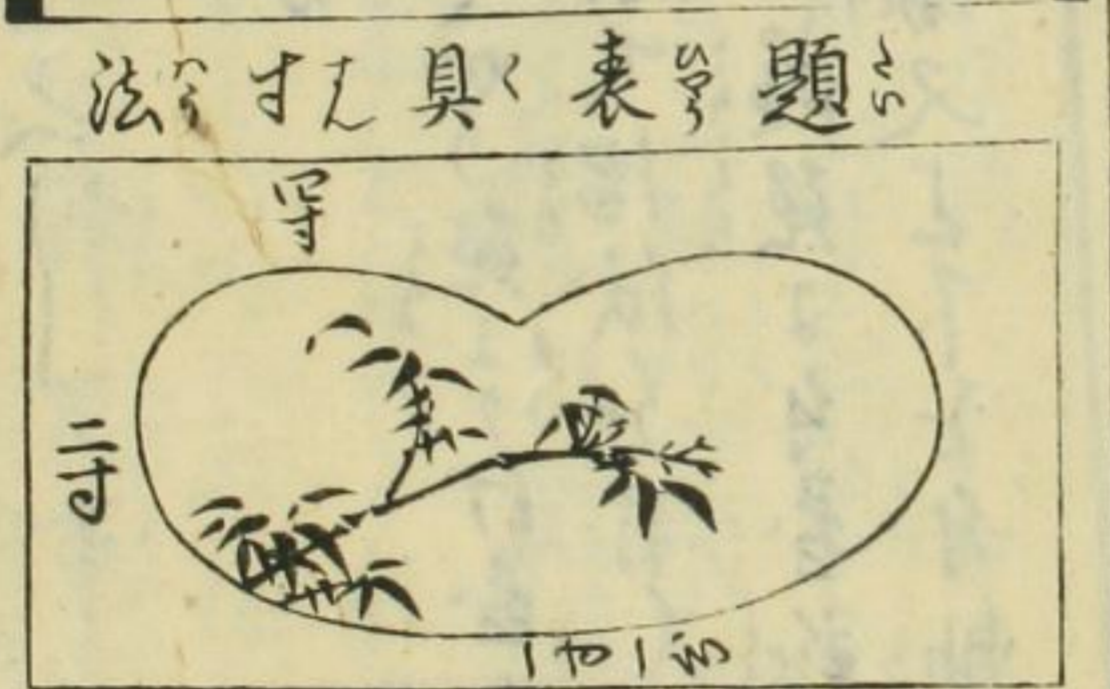
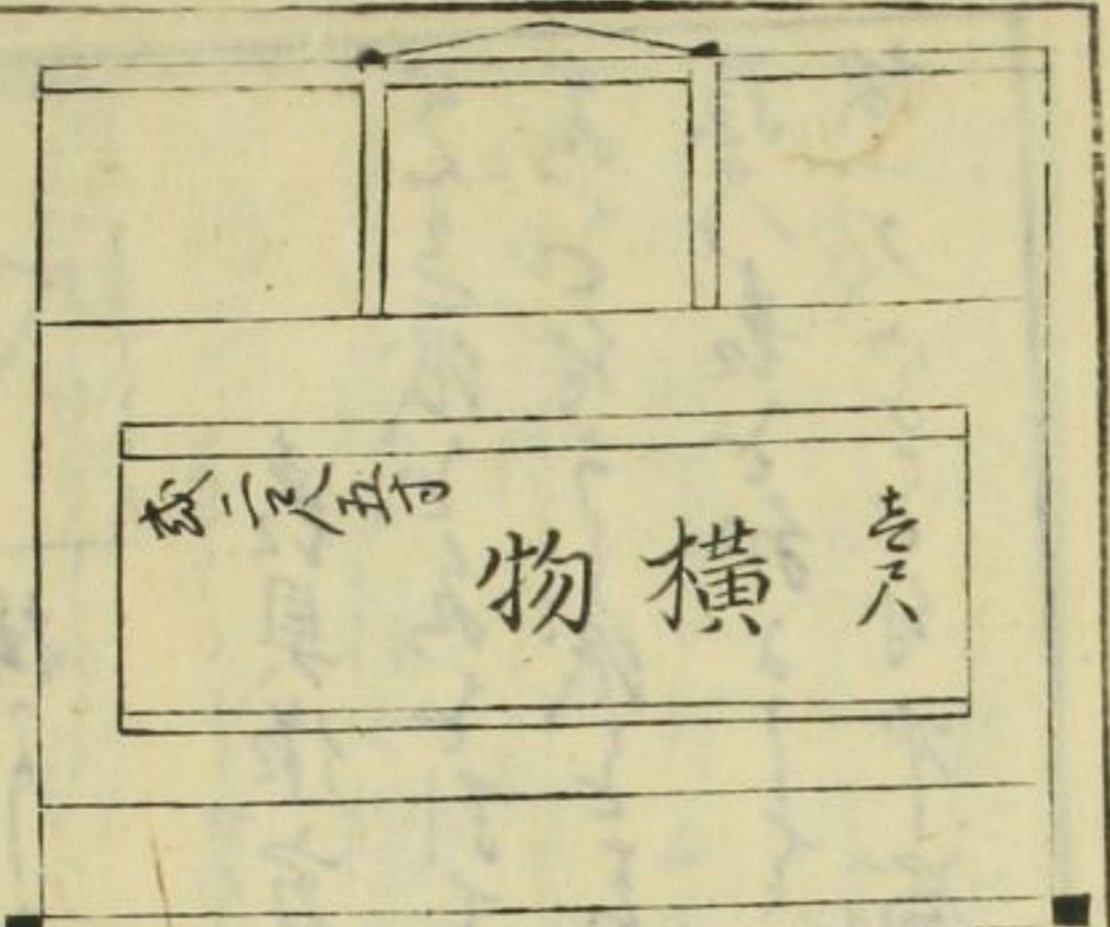
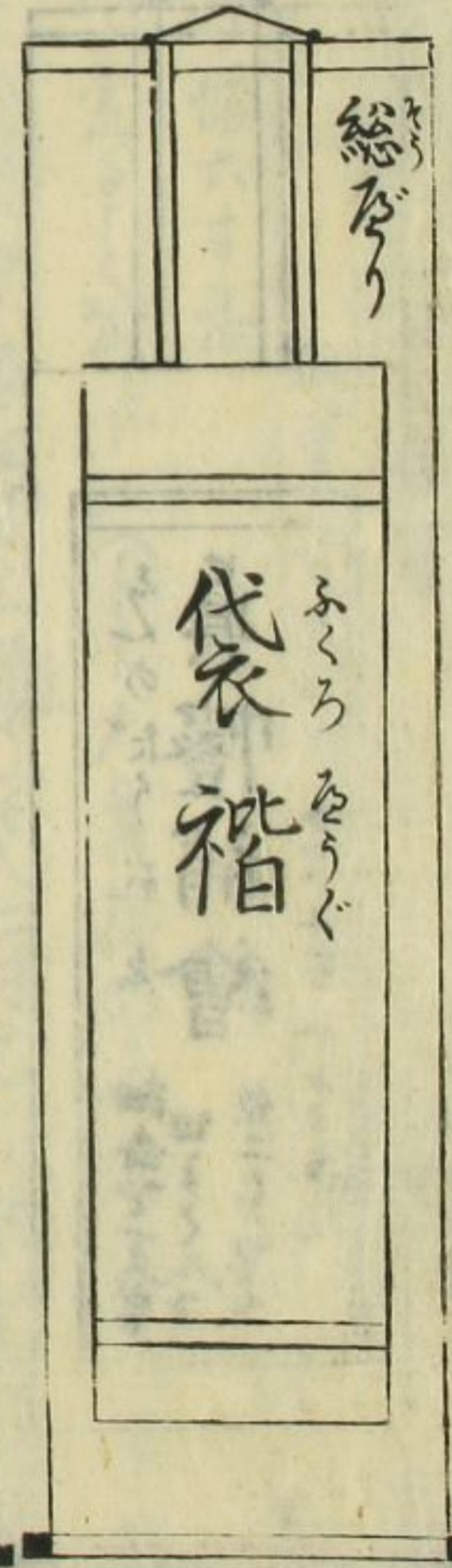
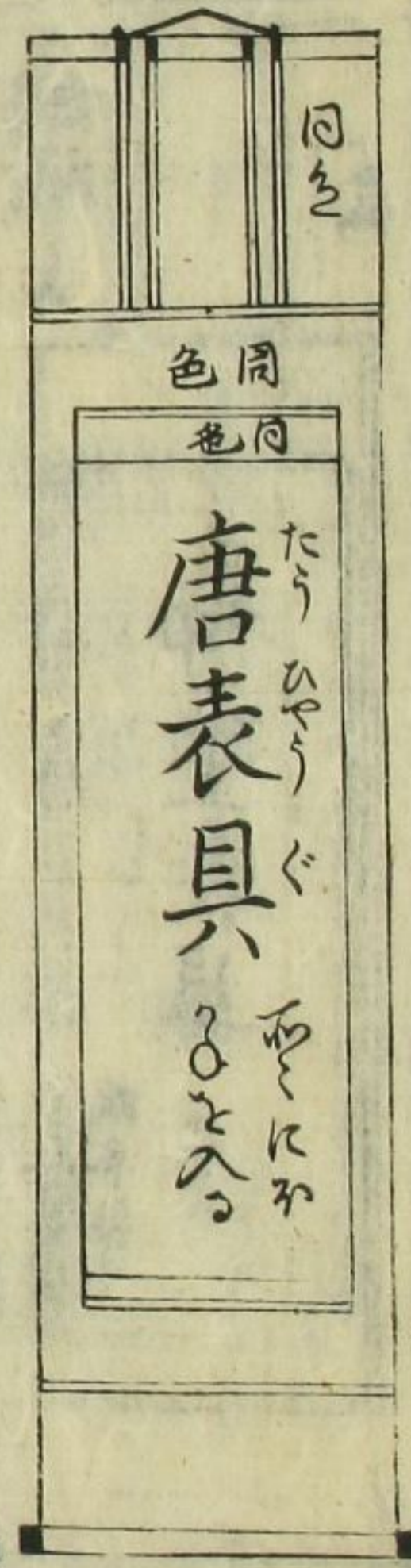
風帯の幅六寸強

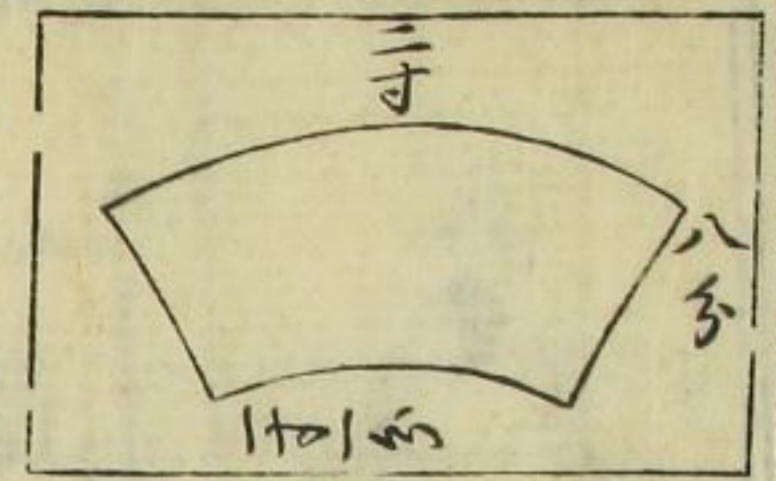
縁の寸法は定ることありけり。今も大旨換の二倍をよりし。此
 一文字子子の時ハ申縁四寸上縁三人二寸太と申けり。一
 分と加て下に用也標本のともみ。○堅之の申縁換の廣
 とたう不忽と云同く換をさしん不忽と云説もあらう。○
 驚懸の間三ヶ所何れも同す。○堅懸おもてよりなる。



○寸法ハ
 右同断
 堅へり
 うらうり
 つらう
 細金
 一文字
 の切ま
 入る
 他三分
 二方細金
 眞の表
 具と云
 四方
 細金
 と云

表のこの方より多く一まの福よ御令をいふまの表の
より御令つくるもあり





たいつと寸法定式ありといふもかく
 らうりす器大器なりと思神の拾好を
 以てた定寸の旨に配當しておゑする
 挿入しよべし

表具作方

はら紙と糸を引てかり強うけを先紙の裏入方に
 糸を付う紙を去て摺紙を用いて腐粘よく裏打
 陰乃表と卵よして紙張より身を離して鉅うこさり
 扱一文字を付中縁又上下と付軸扱の紙をつけ

扱ぬ紙よて裏と折換て別中縁の身より裏
 の方へ引うし風帯と付を乾て後陰の裏と外に
 して紙張より付と下よ軸扱の紙を付てうし一
 又日と強てう折して表端を裁て鬼杵よてうしを
 すり後子軸と標本を自りう折と折換と作る
 にはあり○中表の時の表端をさう折はる
 及無表をうし○降風帯の文字と回さこ
 付風帯の中縁と回さ

腐粘作方

冬月雪をぬて糸とね粘を煉壺よ入中
 中ねをぬてうしね粘を煉壺よ入中

新紙をかきへー大幅物に粘りよく小幅はうすくし
魚ー角用は麩室よ入るなり

屏風張方

先釘とトてつご紙をてしる四角は神板と紙の
又氷をりすとべー強流て糸と折魚ー次は尺のと釘
骨と粘と付ー次はこの押をてて端を截條つひ
をすべー板と同よえと厚きを余條つひの紙の厚
いをよりーとと合せ紙よてて粘をてらるる
とこしらうて切は浮ぶりとする年むりり粘をつけ
骨よりつきは厚ぶりのよは表強をすべー下の一段
をよりて屏風をとさよとゆよてらるる粘をせ乃

ととらるなり是よて重表は合用之裏は浮張のし二
筋なりて粘地とすべー方ハ白聖百目墨を各み下七細
束して水よて粘り粘を加へて引へー次はこらるる玉
と考て粘よて摺垂と加へて摸と付へー

蝶尾寸方

み尺の屏風をうんと下とみすりて中と四つよらん
六尾より大小は依く又尺なり

縁附方

古法の一文字通と云はせん縁を付て摸と摺と一通に
為流の留と云はすしうすくと切合なり之故に合名云こ

軸物巻切方

秘傳は曰ふに軸をとうぶ切うて空奥乃紙の張る
 と能の字と能合を打て折目と粘と付て軸と付て
 別子巻紙乃換子小切る紙を吹く小口と堅出と付て
 軸とつ方より挿入をくはうう一分中内より挿入を
 軸の小口と肩高より切ると又一方もかくの如くして細
 もを方より軸本と突出引抜て是は粘と付て
 挿入。

掛繪三幅一對之事



掛軸は先申すとててを結と解
 下に巻て風帯とふと一おを掛
 軸を掛りけ竿子挟て掛あがり

床へ入り釘よりけて軸とさうくとおら一漸とて又
 右乃方とおの如くかけたたとかけおさかんを結ハ三幅
 左乃印の方へ引へ一〇をぶし換いたれ方より一〇を
 結いた乃方へ引係を出したよて結ひ止る〇印乃
 わる方し次また乃方とつ一を結いたの方へ引よを
 結ひ止る〇印乃の方し次子申すとつ一
 〇を結ひ止る〇印乃の方し次子申すとつ一
 〇を結ひ止る〇印乃の方し次子申すとつ一
 〇を結ひ止る〇印乃の方し次子申すとつ一

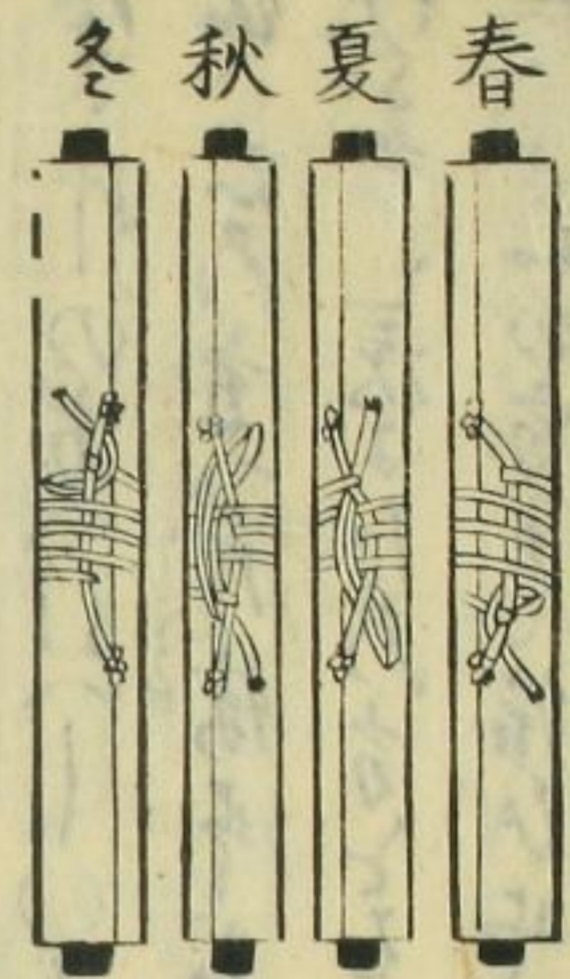
同二幅一對之事



掛軸は上座の方よりりきたを結
 左此方より掛納るを結ひ止る

方へ引へー○こつ一物ハ勝手より引こつー印乃方へ
法とつとせをせど一箇の如く指ひ止るはよ上座を
方も同下の方へ法と行ふと指ひ被む依て敷へ入
て又法乃止つと加とあもよと以てたたと云ふこ

四幅一對之事

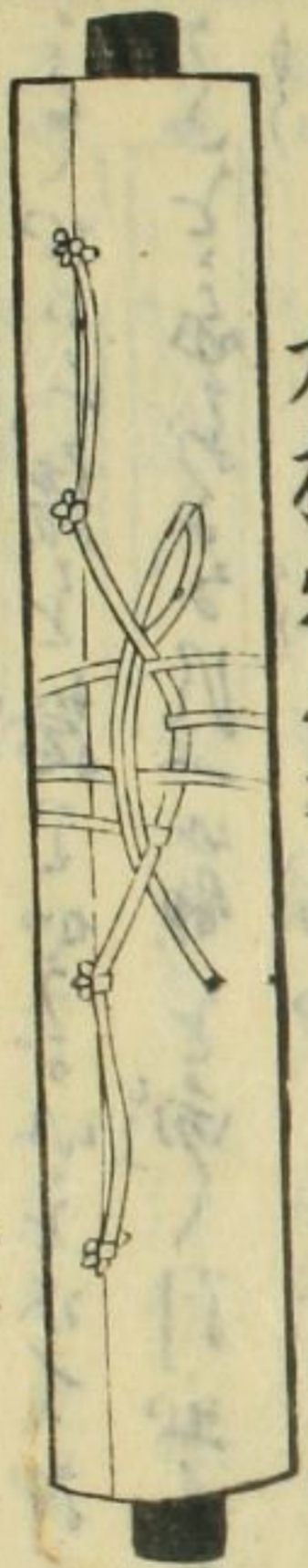


掛板ハ中の二幅の内客居より
初め次よ主と指とかけたは服乃
客居より掛主と指よて掛收こ
○こつ一物ハ指の主おらる

こつ一印乃方より引こつーくつとを収め又服乃
客居をとこつー法ハ是と印代方より引こつと同おこ

此よ中の主と指をとこつー印中へまゝと法を引こつとめ
わふとと下乃方へ引こつー此よ客居をとこつと仕お
やう同おたり

大横物之事



掛板ハ中と法と
とこ風帯と

かと掛板ハ中と法と掛板へ入るは中と加まよと法
の方と法又勝手は方と法と印中の法とこつーあ方
乃引こつと法するこ○こつ一物ハ是と印中とかけ指
印代方をとこつー此よ印中とこつとこつと法三つ引こ
しと云こ巻緒止やうハ右よ引

櫃隠之事



掛つ一ハ幸代一幅物と同ーきふと

伸るものよ同

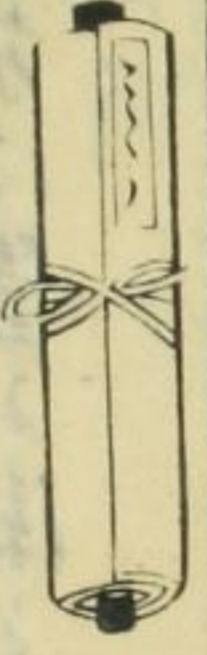
おと物結方



圖の如くならぬを留めしを新と指

ておへ緒を捻じかうがれを以て押進一わな
 ことおあよなは一筋を向く引出と○まきま
 してたるは件の一筋出より結をわて引かんとく
 ろし結を表面の四よの進下にまねをさる又好む時
 緒をさくくとをすしてえれ如くまきとぬ一はさる
 してより大抵上左の段に他より人のあうてを

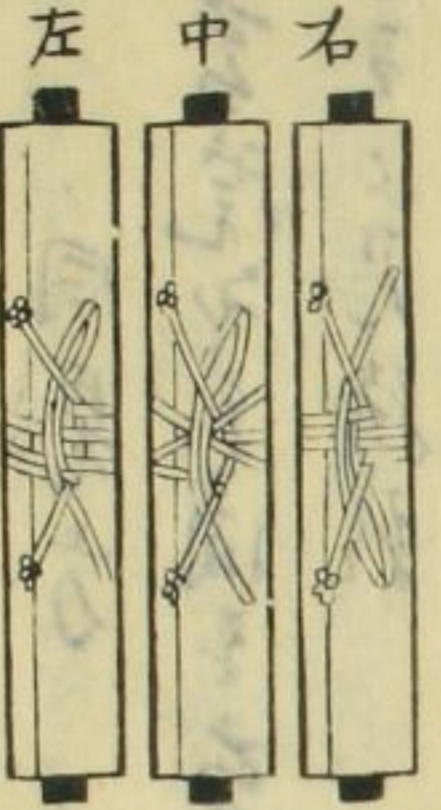
掛圖子ほせよ



又方緒のたのき方より引

ぬへ

三幅對秘方



緒いたいたのよとめて引たいたる
 手とめて引ぬく申さるは下の方
 さら方と扱は結をまきゆることなる

草ハ三巻を世にしが
 ちよつとさ右に右よ進とも又まへ七巻まはしけいひをまき世

掛畫可人渡賣

廣差よ入て伸よて後すア一下よをて懸けの窓へす
 陰のまを板はうとさめの方をほけ人の方へた板を懸へ

繪九人の寢る所ある一三幅の時ハ客位（客位）向（向）お
吾あくして必し

同床掛事（同床掛事）

三幅の時ハ中をうけ次客位（客位）より同をて納る
よハ客中主たり

同見方（同見方）

書院ありし間を二人引と通（通）を直せよとハ三尺中客
主と見終れ

同緒置方之事（同緒置方之事）

絵の糸孔ある方に等（等）は添くさげあつておよも
わし

同床掛礼（同床掛礼）

床子紙を一張（張）とさたの足と床のこまわけを
子紙を掛け折釘（釘）つけちとよと添く添へ一畫と挂
時凡帯飾（飾）ぬ梅（梅）すす

同主位客位（同主位客位）

たを客位（客位）を主位（主位）と又客位（客位）よりしてと主位
と定ことありたしと客南より入る客位ハ三幅の時
南向の絵二幅の時ハ北に主位南に客位（客位）北向の
是より反り

同挂畫挂字色法（同挂畫挂字色法）



紙と二重（重）して一方の端と折く

うけりて人の罷んぬある一三幅の時ハ端おに向ふお

又おけお出ー又おの階よりとれくときて申す畫を
入すく包正中を各引くと様々大小の絵の太くは

白繪之屏風

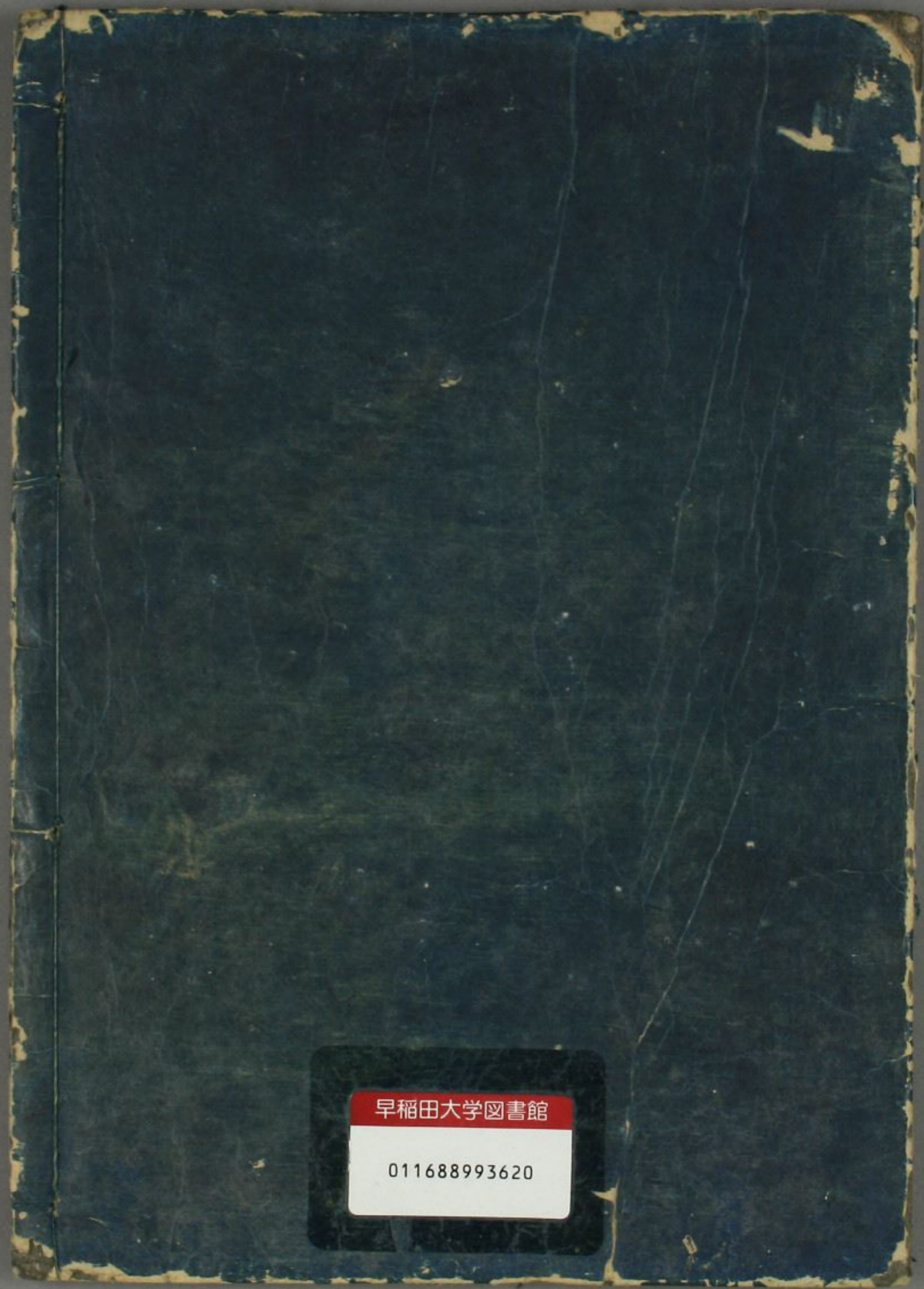
嫁入の時おれを月四絵ハ鶴亀松竹或は鳥と胡
粉よく描銀の涌きを月四裏撰ハ粉地ハ雲母を月
画ー縁ハ白帛ふらと白塗る

享保六^{辛丑}歳季夏吉旦

浪花書肆

伊丹屋茂共衛 連刻
同 新兵衛

下



早稲田大学図書館

011688993620